

COC 総括シンポジウム 第10回地域活動報告会 実施報告書

稚内北星学園大学

Wakkanai Hokusei Gakuen University

目 次

ごあいさつ 稚内北星学園大学 副学長 佐賀 孝博	1
1. COC 総括シンポジウム・地域活動報告会概要	3
2. 地域活動報告会講演録	4
3. ポスター報告(報告資料)	21
4. COC 総括シンポジウム講演録	23
5. アンケート集計結果	52
資 料	61

稚内北星学園大学副学長

事業推進責任者 佐賀 孝博

本学は26年度の文部科学省「地(知)の拠点整備事業」(大学COC事業)に選定され、「地域の教育力向上とまちづくりで協働する地(知)の拠点整備」というタイトルの下、全学的に地域連携活動に取り組んできました。その柱は次の3つです。

- ① 地域の教育力向上
- ② 観光まちづくり
- ③ 中心市街地活性化

今回はCOC事業が今年度で終了するため総括的な機会としました。そのため、通常地域活動報告会のほかに、総括シンポジウムを開催し、各部署より5年間の成果報告ならびに連携自治体の一つである稚内市との公開座談会も企画いたしました。本報告会・シンポジウムについては、市民の方はもちろん、本学も参加しておりますCOC+事業「『ものづくり・人材』が拓く『まち・ひと・しごとづくり』」の代表校である室蘭工業大学の関係者の方をはじめとして、COC+参加校関係者の方にもご出席いただきました。この場を借りてお礼申し上げます。

COC事業における地域活動報告会は今回で最後となりました。本報告会では上記3つの柱に対応した口頭報告3件のほかに、COC事業の取り組みの一つである、教員が地域課題について研究する「地域志向教育研究経費」を活用して研究されたポスター報告3件が発表されました。

3件の口頭報告は教員と学生が共同で報告しました。特に学生が主となって発表を行った、これからの観光資源の可能性、地域の教育力向上のための学生主体の中学生向け塾運営、まちなかメディアラボ(まちラボ)を活用した学生による市民講座についての報告は、それぞれの学生の発表がしっかりしていたこともあり、参加された皆さんからのアンケート結果からも学生の活動が非常に評価されたことをうれしく思います。良い経験をした学生は今後の学生生活でもぜひ、これら活動を活かして、さらなる自身の成長につながるこ

とを期待しています。ポスター発表3件は「地域志向教育研究経費」に採択された研究成果の発表があり、内容について参加者と発表者が意見交換する場が見られるなど、関心度も高い印象がありました。今後も成果については市民の方と共有していきたいと考えております。

COC事業5年間の総括として同時に開催した、総括シンポジウムにおいては、COC事業の3つの柱を運営する各支援室に加えて、本学学生の教育を支援する「わくほくメディアラボ（わくらぼ）」の4部署より、5年間の成果について報告を行いました。

いずれの報告もアンケート回答では、多くの好意的な意見と事業終了後の取り組みへの期待の声をいただきました。COC事業5年間の活動を評価していただいたことについて、事業責任者として幸甚の至りです。

総括シンポジウムでは、本学斉藤吉広学長と、連携自治体の一つである稚内市のまちづくり政策部川野忠司部長、教育委員会教育部渡邊裕子部長による公開座談会も行いました。両部長においてはこれまでもCOC事業で多くのことにご協力いただき感謝申し上げます。本座談会では両部長から見たCOC事業への評価とともに、参加者の方からのアンケートによるご意見やご感想などもいただきながら進行しましたので、私自身も外部の方からみたCOC事業を改めて確認する場となり、実り多い座談会になったと感じております。

本報告会・シンポジウムも学生が実行委員会に加わってくれました。特に留学生も多く加わってくれ、司会進行など役割をしっかりと果たしてくれました。このことはCOC事業が日本人の学生・留学生問わずに着実に成果をあらわしている好例だと思います。

COC事業は今年度で終了しますが、本学は今後も事業名になっている「知の拠点」として恥ずかしくないように、これまで培ってきたノウハウを活かしつつ、学生の能力が発揮できるような場となっていきたいと考えております。これまでの活動はまさに「まちを教室」にして行ってきたもので、稚内市はもとより連携自治体や地域の方々のご協力なくしてはできなかったことばかりだと考えております。今後も学生・教員ともども地域の将来を見据えた活動を行ない、地域の発展の一助となるように活動してまいりますので、引き続き学生が成長するために皆様からご助言、ご指導、ご支援いただければ幸いです。

1. 地域活動報告会およびCOC総括シンポジウム概要

地域活動報告会は文部科学省の補助期間最後となる第10回目を迎えた。また、合わせて本学COC事業の成果報告の場として、COC総括シンポジウムを行う運びとなった。COC推進委員会では、具体的な実施計画の草案を8月28日に提出し、同日実施計画を正式決定した。その後、教授会への報告、委員会での審議を重ね、実施に至ったものである。

〈第10回地域活動報告会〉

主 催: 稚内北星学園大学

会 場: 新館 1401 教室

日 時: 平成30年10月27日(土)10時30分～12時00分

※終了後30分はポスターセッション

発表形式

口頭発表及びポスター発表形式とする。

〈COC総括シンポジウム〉

主 催: 稚内北星学園大学

会 場: 新館 1401 教室

日 時: 平成30年10月27日(土)14時30分～16時40分

発表形式

口頭発表および公開座談会

・COC総括シンポジウム・第10回地域活動報告会実行委員会
伊藤良平・石尾美岬・杉浦健太・ユバラズ ゴータム・アスタ センチュリー・プン スミット・板谷瞭・前原颯・ラメシュ スベディ（以上、学生委員）・佐賀孝博（実行委員長）・石黒志津・鏡山樹・三浦猛・中川圭太・向光宏・石橋豊之

第10回地域活動報告会

口頭報告 会場: 稚内北星学園大学 新館 1401 教室

第1報告

10:35～10:55

○ 報告者

ゴータム ビスヌ プラサド (情報メディア学部 教授)

ブン スミット(情報メディア学部 2年)

○ 報告題名

Aamako Jato: Revival of Traditional Tools with Modern Mind

(和訳)ママの石臼:現代知識による伝統的なツールの復活

○ 報告内容要旨

本研究では、古代農具や文化観光の側面に重点を置き、特に、宗谷地域やヒマラヤ 山脈で活躍されて来た古代農具(例:石臼)のIoT化について研究開発を行った。これにより、開発可能となったIoT化されたリアルな石臼をこの地域の若者に体験してもらうとともに、石臼を利用したヒマラヤの食文化の交流により、文化観光とのポテンシャルと新しい観光開発の発見を地域の人々と共に考えることとした。本発表では、このプロジェクトの現状と今後の活動について報告を行った。

第2報告

11:00～11:20

○ 報告者

石尾 美岬 (情報メディア学部 3年)

但田 勝義 (情報メディア学部 教授)

○ 報告題名

「教たま数学教室」における学びと現状及び課題

○ 報告内容要旨

「教たま数学教室」では、教職ゼミ所属の学生が中心となって、中学3年生に数学を教えている。これは「無料塾」として実施した2015年夏から毎年形を変えながら継続している活動である。本報告では、現時点での活動内容をもとに、活動を通じた学生にとっての学び、活動の現状と今後の課題について発表を行った。

○ 報 告 者

田村 龍一 (情報メディア学部 准教授)

田村真理子(まちなかメディアラボ メディア表現指導員)

板谷 瞭 (情報メディア学部 2 年)

前原 颯 (情報メディア学部 2 年)

ラメシュ スベディ (情報メディア学部 2 年)

○ 報 告 題 名

まちラボを拠点とした学生と市民の学びの交流

○ 報告内容要旨

本年度の「まちラボ」の重点目標のひとつに、本学と市民へのアカデミックな交流を 促進することがある。この目標達成のために、本年度学生の積極的な関与による市民への公開講座を開催した。本発表では「おもてなし English」「中級 Excel」「商店主セミナー」をケースとして、それらの開催の根拠を論じ、開催内容と成果を共有した。

○司会 こんにちは。皆様、本日はお忙しい中、稚内北星学園大学COC第10回地域活動報告会にお越しいただきましてまことにありがとうございます。定刻となりましたので、始めさせていただきますと思います。

私は、本日司会を担当いたします稚内北星学園大学情報メディア学部情報メディア学科4年のユバラズ・ゴータムです。不慣れではありますが、本日はよろしく願いいたします。（拍手）

まず、皆様に御確認がございます。

この会の様子は録画、録音、また、会場内を写真で撮影しており、報告書等作成などのために使用することとしております。この点につきまして、会場内の皆様の御了解をいただきたいと思っております。よろしく願いいたします。

初めに、本学COCの事業推進代表者である斉藤吉広学長より御挨拶いたします。

○斉藤学長 おはようございます。

本日は、天気がいまいちの中、お越しいただきありがとうございます。また、わざわざ旭川、札幌、室蘭から足をお運びいただきまして本当にありがとうございます。

このCOCの地域活動報告会は、COCの補助金を受けたときから10回目、年2回ずつ開いております。

この主な目的は、ここにありますように、まちを教室にして行った地域の活動、主に学生が行った活動について、ここで発表、共有して、学生を励ましていただくという趣旨で行っているものです。また、ここ何回か、会場からの質問や感想や励ましはあまり出ななかったので、できたら、それぞれの発表に対して何かコメントいただけたらうれしいと思っております。

主に学生の活動の事例報告になりますけれども、午後の総括シンポに向けまして、来年度はもう補助金がないという中で、これまで培ってきた経験等をこの後に活かしていくかという材料としても聞いていただきたいと思っております。COCの補助金は終わりますけれども、知の拠点としてのCOCを本学が「やめる」わけでありませんので、どういうふうに今後活かしていくのかといったことを踏まえながら、これからの報告を聞いていただきたいと思っております。

本日はどうぞよろしく願いいたします。（拍手）

○司会 ありがとうございます。

今回の報告会の報告は、口頭発表とポスター発表となっています。ポスター発表は学会等で用いられる発表方法ですが、なじみのない方もいらっしゃるかと思います。簡単に言いますと、参加者と報告者がポスターに書かれた研究内容について時間をかけて検討する報告形式のことをいいます。

口頭報告

第1報告

○司会 それでは、これから口頭発表を三つ行います。報告は、報告20分と質疑5分というふうになっております。

第1報告は、ゴータム・ビスヌ・プラサド教授と情報メディア学部3年のブン・スミット君が「Aamako Jato: Revival of Traditional Tools with Modern Mind」について報告いたします。

お願いいたします。

○ゴータム教授 おはようございます。

これから、先ほど説明あったように「Aamako Jato」、ママの石臼という意味ですが、これの「現代知識による伝統的なツールの復活」というテーマで発表させていただきます。

本発表は、僕が今発表するのですが、学生も一生懸命やっている活動ですので、ぜひ聞いてい

ただければと思います。

きょうのこの内容は、この課題はどういうふうに取り組んできたかというのと、今の準備と今後の計画などについて説明したいと思います。

まず、背景と課題なのですけれども、皆さん御存じのとおり、今、いろいろな地域がさまざまな課題に取り組んできています。例えば、高齢者の課題とか、人口減少の課題とか、いろいろあるのですが、ネパールでは、若者が田舎から町に移住することとか、あるいは海外に就職に出るということで、非常に若者のいない田舎がふえております。こういった課題があるのですね。日本にもよく見られる課題なのですけれども。

そういった課題からどういうふうに脱却するかという、いろいろな課題対策方法が、例えば、日本だったらソサエティ5.0という、あるいはスマートコミュニティとか、ネパールもスマートシティみたいな課題を解決手法として考えている段階ですが。また、田舎はどういうふうにスマートにするかといいますと、田舎は持続可能なことを考えなければいけないですね。そういった意味でも、本プロジェクトを始めたきっかけにもなるのですけれども、何で「ママの石臼」と言うかといいますと、これはネパール語の略で、ネパール語から由来している言葉なのですけれども、これは昔から利用されてきた農具、例えば石臼、馬鋤とか唐鋤などいろいろあります。日本でもそうなのですが。こういった機器が現在は絶滅の危機にあって、ヒマラヤ地域でさえ珍しいものとなってしまっている。多くの原因は、農具や農耕が近代化されているために農業の人气が低下したのではないかというふうに考えています。

同じく宗谷地域にもこういう人口減少があつて、この宗谷地域に持続可能な仕事というのがあると思うのですけれども、日本ではスマートコミュニティとかソサエティ5.0に力を入れています。

この日本でも古代農具を復活するという、ネパールだけの問題ではなくて日本でも課題の一つであり、こういったことから、例えば文化、観光、稚内でも今観光業にすごく力を入れていますけれども、そういう文化、観光の側面から、何かポテンシャルがあるのではないかというふうに思います。

主なそういった背景から少し目的を絞っていきますと、これのほかに午後の方で説明する、Smart Tourism Process Framework という、観光業をどういうふうを整備していくかというフレームワークがあるのですが、そのフレームワークとの連携。こういう農具の中で特に石臼に注目して、これのIoT化、最新技術を導入することで、遠隔にいる母親たち、例えばネパールのヒマラヤにいる母親たちの家事を遠隔から手伝うことを可能とすると、これが目的ですね。そういったことによって、家族と一緒に暮らしているという、そういった空間をつくるという、バーチャル空間をつくっているというのがこの目的で、また、地域の文化、観光開発にも、結果的にこういったことにも貢献できるのではないかということが主な目的であります。

先ほど言ったスマートコミュニティとかソサエティ5.0というのはどういうものかと少し概念図で説明しますと、例えば、今、スマートコミュニティは国によってそれぞれ事情が違いますので、定義も違うのですけれども、日本では、スマートライフアンドリビング、スマートエデュケーション、教育に関しても観光に関してもコミュニケーション、通信インフラ、あるいは交通インフラとか、ガバナンスですね、スマートサービスのガバナンス、行政のシステムとかですね。あとエンプロイメント、スマートエンプロイメント。こういったところが特に注目されているところで、これにビッグデータ、AI、IoT、ロボットなどの新技術を組み込んで、こういったサービスを豊かにしていこうというスタイル。これを最近ではソサエティ5.0という言葉を使って、政府がいろいろな企画を提供しています。

では、古代農具のほうは、皆さんは御存じだと思うのですけれども、この「Jato」という言葉が石臼です。そのほかに「dhiki」Wood Pestle というのですけれども、これはきねです。きねと臼といいます。もう一つ、ネパールでは「Nanglo」というのがあるのですね。唐箕、ふるいという言葉で表現されるわけですが、よく田舎で使うのが「Halo」Plough、馬鋤。牛鋤というのが、ネパールで牛鋤という意味なのです。日本語では昔、馬鋤を使っています。

図でいいますと、これがマギシ、ドウシとか、これとかですね。日本の古代農具、馬鋤、あるいは牛

鋤。ネパールで牛鋤。中国とかでもこういった牛鋤とか、いまだに使われている田舎があります。

ところが、この写真にもあるとおり、今、利用しているのは非常に年をとっているおじいさんですね。高齢化社会。当時の石臼も、高齢化社会になって、非常に重量が重いので使いづらくなっていると。例えば、これ結構重いです。ここを押して、ここでこうやって餅づくりとか、粉づくりとかするのですけれども、これが非常に重いのです。これが重いので、ここを持って回すのですが、これもなかなか高齢化になっていくと、それが使いづらくなってきます。

では、マシンがあるのではないかという言い方があるのですが、それはあまり持続可能なものではない。その技術がないので、どこかで依存しなければいけないことが生じてしまいます。それが経済とか、いろいろな問題につながってしまうので、そういったことがないように、その持続可能な技術を発展していこうという試みです。

さらに、ネパールでは、例えば、その石臼を水力で回すという技術があるのですが、水というのはいつでもあるわけではない。そうすると、かれてしまって使えなくなってしまう。これが石臼。上下に移動するのですけれども、こっちは回転する。これの発展した農具です。

日本の石臼。ちょっと古い写真を見ますと、これは日本の石臼ですね。ここに穴があいていて、棒がついていますけれども、日本では横のほうに。これは日本の技術ですね。中もこういうふうには6本ナット、8本ナットというのが基本になっていて、今はもっとメッシュしてやるのですが、もともとはこれが基本になっています。

実はこの石臼をいろいろ調べていて、いろいろな国に、いろいろな文化に利用されているということはわかってきているのですが、いつから始めたかというのはなかなか、まだはっきりした日付が特定できておりません。

では、本大学で取り組んでいる石臼の準備状況を少し説明いたします。

こちら、1月ぐらいに現地を訪問して、この材料を利用して石臼をつくったのですが、非常に大変でした。短い時間でつくったのですが、全自動はサポートして、僕の母親なのですが、こういうので自動化されているという、非常にうれしく、よかったという言葉をいただいております。

また、日本では、かなり多くのイベントで、現時点では、今年に入って7回以上、石臼でひいた米粉を利用して、セルロティというのをつくって、市民と一緒にいろいろな機会、例えば、これは富岡のお祭りで一緒に食べているシーンですね。これは大学内の学生と一緒に楽しんでいるシーン、そのほかにも、まちラボとかでロティを食べて、市民のフィードバックを得ております。

今後は、後ほど、ちょっと今の状況を見せたいと思うのですが、本研究は現在開発進行中のSTPFの実装実験の事業をもとに、リアルで開発するべきイデオロギーとIoTとの融合による古代農具の復活、イノベーションについての試みですが、石臼を先月、全国大会に出まして、それは全国のトップ、1位になっております。ガレッジニアという部分で、今度、全国チャンピオン大会に出場して、そこで発表することになっております。本日、本来ならば、この辺で登場させて、実験を見せたかったのですが、そちらのほうを今準備しているものですから、ちょっと持ってこられないのですが、後ほどちょっと遠隔から制御するという実験をしたいと思っております。

また、石臼とリアル空間の融合、モーションセンサーなどを取り入れて、例えば、遠隔から操作できない、こういう機具のシグナルを使って操作する。そういった道具を使っていきたいと思っております。

今、この下のほうに、実験室に石臼があります。それをこのスマートフォンから制御、言葉をかけて向こうの石臼を起動しようという実験なのですが、この実験の意義は、例えば将来、ヒマラヤのほうの石臼を日本に暮らしている子どもたちが、母親の家事をどういうふうには手伝うかということ、自分のあいている時間に向こうのいろいろな農具を動かしていると、そういったことで家事を手伝うと。また、それをリアル空間に　させて、一緒に暮らしているという空間を与えるという。リアル空間に関しては今後の研究なのですが、制御というのは今でも可能ですね。ですから、高齢化社会になっている社会を若者がどういうふうには手伝うか。それによって、今、家族がばらばらなのですが、ある

程度家事をする、手伝うことによって、家族のきずなをもう少し温かくする。一緒にいるということ、年をとっている母親、父親に、それとメッセージを伝えるというのがこの開発の心、思いでもあるということ。

すみません。今、下で少し待っています。

今、下の映像が映っています。これを少し制御したいと思います。

ちょっと起動します。電源をつけてください。（「わかりません」の音声あり）すみません。わかりませんと言われました。

では、起動します。電源をつけてください。（「承知いたしました。Aamako Jato を起動します」の音声あり）

そうしますと、今、下で起動しております。今ちょっと二次元の画像で転送しているのですね。一緒にいる空間はなかなか感じないと思うのですが、これをリアル空間で、ヘッドセットを使って、そうした画像を転送しておけば、これも一緒にいるという、ある程度ですね。リアルタイムというのは、もちろん今の技術では難しいのですが、三次元空間を転送することで、テレポーテーションというのですが、テレポーテーションすることで、いかに向こうの空間とこっちの空間を一緒に共有して、それを一緒に手伝っているということを体感させるというのは今後の研究になるかと思います。

では、今起動しています。例えばこれ、今、こういうふうになかなか上に出ないので、刃がちょっと削れ過ぎるので、これ以上起動させません。ちょっととめます。電源を消してください。（「承知いたしました。Aamako Jato の電源を消します」の音声あり）

このように遠隔のいろいろな農具ですね、単純に石臼だけではなくて。スミット君、ありがとうございます。今、スミット君が下で、ちょっと準備に行ったり来たりしていたのですが、彼ともう一人、4年生の伊藤君がSTPFのところで登場するのですが、この3人で横浜に行って、これのアピールをしてくる予定です。

現時点ではこの辺までですが、来年度に入ってから、三次元空間を体感させるという実験をしていきたいと思いますので、ぜひ、楽しみにしてください。

以上です。ありがとうございます。（拍手）

○司会 ありがとうございます。

それでは、ただいまの報告について、フロアから御質問や御意見、あるいは御感想をいただきたいと思っております。いらっしゃいますでしょうか。

ないようでしたら、3報告終わってからもう一度、質疑、感想をいただく機会を設けますので、第1報告はこれで終わらせていただきます。

第2報告

○司会 続いて、第2報告は、情報メディア学部3年の石尾美岬君と但田勝義教授による「「教たま数学教室」における学びと現状及び課題」について報告いたします。

では、お願いいたします。

○但田氏 皆さん、おはようございます。

私たちのほうからは、地域教育支援室の報告として「「教たま数学教室」における学びと現状及び課題」というのを報告させていただきたいなと思います。

報告の内容は、一番上と一番下は狙いと目的、それから今後のあり方についてですが、これは私のほうから。それから真ん中の三つですが、今の数学教室の様子や成果、課題、そして改善点は、学生のほうから報告をしたいなというふうに思っています。

狙いと目的なのですが、2015年夏にCOCの事業として、まちラボで無料塾が始まりました。2016年から、子供の貧困の研究と教育支援という視点から、自主的、自発的な地域貢献活動はどんなものがあるのかという研究として、「教たま数学教室」というのを開いています。

ちなみに、大学の関係者はわかるのですが、「教たま」というのは、教師の卵という意味です。ですから、学生の教育活動になります。

まちラボという場所と、それから無料ということによって、場所的にも、それから経済的にも安心して子供と学生と一緒に学び合う、そういう学びの場を追求していくというのが一つの狙いです。

二つ目ですが、大学づくり、まちづくり、学生育ちという、市民の方と触れ合う中で、本学が教育理念として持っている地域貢献、人間力向上というのを達成する狙いを二つ目の狙いとして考えています。

今年度の目的なのですが、昨年度までの成果と課題の中で一番話題になっているのは、実は、子供たちは、学校でも塾でもわからないということが言えないのです。特に、授業や学校の中で言うと、恥ずかしかったり、それから、みんなにどうやって思われるのだろうと、そういう気持ちがあって、わからないのが言えないというのが彼らの訴えでした。そういう現状の中で、学びの楽しさは、未知なところから理解をして活用するということから始まります。そういう意味で、その始まりがつまずいてるわけです。ですから、数学教室では、これらの多くの取り組み課題として、一つ目、この「わからない」からスタートするという目的で前期から始めているところです。

それから二つ目なのですが、COCの事業が始まったとき、事業に参加する、授業で参加するというテーマがありました。これは5年前のことです。そこから5年たって、今は事業を工夫する、授業で工夫するという参加から想像の意識に変えていく必要があるのではないかとこのように思っています。数学教室もそのようなもろもろの工夫をしながら、今、市内の四つの中学校から、定員は一応6名から始めたのですが、14名熱望して、どうしてもやりたいということで、学生への期待が大きい、そんな教室になっています。

この後、この数学教室の様子を学生のほうから報告してもらいます。

○石尾氏 ここからは、私、3年、石尾美岬が報告します。よろしくお願いします。

まず、数学教室の様子です。これについては、先ほど但田先生からありましたように、中学生と学生が授業という形をとり、このように立って教えているとか、このようなスタイルで今数学教室をやっています。

この写真の中で、この右上の写真ですね、これについて少し説明しますと、大学から備品として少しホワイトボードマーカーであったりコンパスであったり、こういうものを数学教室のときに持参しています。これを持参することによって、中学生にできるだけわかりやすく、どのように教えたらいいかというのを工夫しながらできているのではないかなと思います。なので、数学教室では、中学生を対象としていますので、できるだけこういうものを活用して今教えているという取り組みになっています。

ここからは前期の成果と後期の改善点を報告いたします。

まず、前期の成果で、やったこととしましては、まず個別指導を行いました。数学教室が終わった後に、すぐ学生が集まりまして反省を行います。その反省した内容を大学に持ち帰って、学生全体でランチミーティングという形をとり、一応個別指導ですので、マンツーマンで勉強を教えているのですが、その引き継ぎ、生徒の引き継ぎを行うというのを前期に行いました。ここからわかる成果として、生徒の実情がわかるということがあります。学生が情報共有して、ランチミーティング等で共有して、生徒の苦手を確認することが、わかるようになったということが一つ成果として挙げられるのではないかなと思います。

また、個別指導なので、1対1対応ですね、マンツーマンで指導することによって、生徒の反応をじかに感じ、説明できるということがわかってきました。マンツーマンで行っているのでも、その生徒が、ペンがとまっていたり、わからないなという



表情をしたときにすぐ学生が感じ取って、こういう説明にしよう、こういう教え方にしようというのを工夫しながら前期はできたのではないかなと思います。

最後の生徒のつまずきを発見できる。これは上に対応しているのですけれども、なかなかずっと情報が入ってくれない、生徒がわからないというときがあるので、そのつまずきに応じて、ちょっと勉強のスタイルを戻してみたり、ちょっと教え方を変えてみたりするというのが前期にできたことであり、生徒の実情がわかるということが挙げられるのではないかなと思います。

これに対して後期、改善点を行ったのですけれども、まず大きく変えたところとしましては、一斉指導を行っています。ただいま一斉指導を行っている最中です。また、生徒が学びたい問題を選択することも今改善点としてやっている最中です。これについては、後ほど詳しく説明いたします。

また、記録ノートの活用というものも行っていて、これについては、このような数学教室個人記録ノートというのを生徒に書いてもらいまして、内容としては、きょうやったことを、ここができたなど、生徒の感想を書いてもらって、我々学生に出してもらおうというのを今、後期に新たな取り組みとして行っています。

後期の改善点ですが、生徒の自主的な学びとあります。最初に問題を選択してもらおうというところが先ほどありましたが、これについては、初級、中級、上級とレベル帯を決めて、まず生徒に取り組んでもらっています。これによって、生徒が学びたいということを事前に意識させるということ、意識づけして行っています。生徒がこのコースに行きたい、このレベルできょうは勉強したいということ、を数学教室が始まる前に行うことで、勉強モードに入ってもらいつつ、数学教室が始まってからスムーズに動けるようにこのような活動を今、前期からの改善点として行っています。

二つ目の改善点として、学生の授業意識ということがあります。後期からは一斉指導を行うということ、を先ほど報告しましたが、これに通じて、授業力の向上を図ることが一つ挙げられます。教育実習とかに行ったときや、将来的に必ず授業をするということは必須条件になってくるので、このような数学教室というものを通して学生が授業を実践する、何か改善をするということができて、授業力の向上が図れているのではないかなと思っています。

二つ目として記録ノート、先ほどの記録ノートを活用して赤ペンを入れるとあります。生徒から感想をもらって、それに対して、きょうはこういうところがよかったよ、来週はここを頑張ってみようというのを学生が実際に赤ペンを入れまして生徒に返す。これをすることによって、学生と生徒との距離をできるだけ詰めていくという取り組みも行っています。

最後です。学生が子供の変化を見る目線を持ち、生徒ともかかわりやすくなると。個別指導ではマンツーマンだったのですけれども、一斉指導を行うことによっていろいろと見るところが多くなるのですけれども、子供の変化にアンテナを張りつつ、しっかり見る目線を持って生徒としっかりかかわっていくということが、学生が授業を意識することにつながっているのではないかなと思っています。

これから動画を見ていただこうと思うのですが、これは後期の一斉指導の動画になります。

ここにいるのが、一斉指導のときの授業者で、この2人、学生なのですけれども、この2人がここにいる生徒に対して、わからないと生徒が言っていたので、個別指導を行っているという動画になります。なので、一斉指導と個別指導をうまく融合させたという取り組みになっています。このようにマンツーマンで教えて、わかったとなったときに一斉指導に戻るというスタイルをとっています。

授業者が、まちらボにこのような大きいホワイトボードがあるので、これを使用しつつ、生徒の人数も多いですので、授業スタイルをとっている。ここが一斉指導をすることによって学生の授業力向上につながっているのではないかなと思います。

続いてですが、前期の最後に、生徒に対してアンケート調査を行いました。これについても少し説明いたします。

まず、自分の勉強はどうでしたかということですが、左の円グラフ、「とてもよかった」が90%、少数派の意見として「あまりわからなかった」というのもありました。これについては、ちょっとわか

らなかったけれども、学生に聞いたことによって改善できたというのも含まれていますので、あまりネガティブな印象ではないのかなと思います。

右の円グラフに関しては、「わからないところが聞けた」が54%、残りの46%は「聞けなかった」と「わからないところがなかった」というのが挙げられました。わからないところがなかったら聞くこともないですので、そちらはいいのですが、「聞けなかった」ということがあるので、これはちょっと学生と生徒との距離が遠くなっているのかなということも危惧されるので、ここは学生が今後見直していく点かなと思います。

次です。先生、我々学生の教え方はどうでしたかということですが、左は、「教え方が上手だった」が99%、残りが「まあまあだった」と。ここはかなり好印象が出ているのではないかなと思います。

右の円グラフですが、「わからないところが聞きやすかった」が63%で、残りは「熱意や親切さを感じる教え方だった」とあります。ここの質問に関しては、記述式ではなく選択式なので、ネガティブな答えもあります。「聞けなかった」とか「聞きにくかった」とかという選択肢もある中で、このような「聞きやすかった」であったり、「熱意や親切さを感じる伝え方だった」、こういうのができていたということは、かなり学生の意識向上につながるのではないかなと。これから頑張っていくことなのではないかなと思っています。

最後です。生徒の自己評価と先生、我々学生の評価はどうだったかということですが、どちらも90%を超えています。自己評価に関して「あまりよくなかった」というのが、先ほどもあったように、改善できたけれども、ちょっとできなかったところが多かったなのも含まれますので、ここはどちらに関してもかなりポジティブに捉えていいのかなと思います。伝え方に関しても、これからもっと改善していく点がありますので、ここをできるだけ少数派のパーセンテージを少なくする必要があるのかなと思います。

次です。研究的な成果と課題について報告いたします。

まず、これは前後期あわせてなのですけれども、研究的なこととしましては、生徒に合わせた指導法の工夫や、中学生に伝えるときの言葉遣い、また、到達目標の明確化、ここが挙げられていて、成果としましては、個別指導、一斉指導からの学びができたのではないかなと思います。

生徒の理解度を把握することによって指導形態や教え方を工夫したとあります。こちらは、先ほど動画を見ていただいた中でもあったのですけれども、一斉指導をやっている中で、わからない生徒がいた。その子に対して個別指導を行うという指導形態をいろいろ変えながら、わからない子に対しては違う教え方をしてみるというような教え方の工夫、こういうのが成果として挙げられています。

また、生徒のつまづきに応じて説明内容をかみ砕いてわかりやすく伝えたということも今成果として挙げられています。個別指導も一斉指導もアンテナをいろいろ張る必要があるので、その子に対してどうやって伝えるか、わからない言葉であったらかみ砕いて、よりわかりやすく伝えるというのを個別指導、一斉指導から学んで、これが成果として挙げられると思います。

研究的な課題に関しては、目標を明確にした授業を行うという点と、高校数学で活用する見通しを持つという、この二つが挙げられていて、課題は大きく二つあったのですが、まず、学生のひとり舞台化ということが課題として挙げられています。先ほど、かみ砕いてわかりやすく説明するとありましたが、この説明の仕方がどんどんどんどん長くなってしまって、結果くどくどくしてしまうということもあります。また、その説明のし過ぎによって、学生はただただしゃべっているだけ、ただただ話しているだけで、話し手のほうに移ってしまい、生徒はどんどん聞くだけの聞き手に変わってしまうと。この話し手と聞き手の関係にあることによって、ちょっと線引きが行われて、距離が遠くなってしまっているのではないかなと。ここがまだまだ課題であると感じます。

改善方法としましては、できるだけ説明を短くする。簡潔にわかりやすく教えるということがあります。また、生徒に問いかけを行うことによって、できるだけその説明を生徒にしてもらい、問題の答えを生徒にどんどんどんどん答えてもらうということが、これからこの課題に対して改善する必要がある、

このように改善していく必要があるなと思いました。

次です。数学の系統性ということなのですが、私たち教えているのが中学3年生の数学だけです。ですが、今まで中学校1年、2年と学んできた内容、また、これから高校に進学したときに高校数学を学ぶと。その二つの数学をばっさり分けてしまうのではなく、今まで学んできたことと今学んでいること、さらにこれから学ぶことという関連性を少しでも生徒にわかってもらおうと。また、その関連性をしっかり学生が頭に置いた上で、今、中学3年生の教えている内容を、今までとこれからを考えながら、単元の関連性の意識づけを行う必要がまだまだ課題として残っているのではないかなと思います。これもしっかり改善していく必要があると思います。

○但田氏 最後に、今後のあり方ということで、後期の課題と今後の数学教室のあり方をまとめて終わりたいと思います。

学校との連携の充実ですが、学校や家庭での子供の変化と数学教室での子供の変化というのを、双方向で情報を交換したり、共有するというのが今後必要かなというふうに思っています。毎晩、親が迎えに来るのですが、そのときに言葉を交わすことはあるのですけれども、もう少しその辺は学校とも連携をとる必要があるかなというふうに考えています。

それから二つ目ですが、教員を目指す学生ですから、学校現場で問われるのは授業です。専門的な知識に基づいた授業内容と対話的で深い学びが問われる、そういう授業づくりが学生には問われます。一方で、学校現場で求められているのは、思春期を迎えた生徒の心と生活を読む、そういう子供理解の力量というのが求められています。そういう意味で、この数学教室が問われる授業づくり、求められる子供理解として、学びの場として活用することが有効なのではないかなというふうに考えます。

今後のあり方なのですが、今後の展望としては、わからないということはどう考えるかということですね。わからないと言えないのは心の問題ではありません。自信を失いかけている子供が成功体験を積み重ねながら自信を持つこと、そこがポイントになります。貧困を自己責任として切り捨てるという、そんな課題が先日、報道でも、新聞でもありました。同じように、学びを学力問題として切り捨てるのではなくて、誰も置き去りにしない、そういう学びの場として数学教室が今後発展していくことが大きなところかなというふうに今の時点では考えています。

なお、皆さんの左手のほうに、冊子「教たま」を置いてあります。3年分の学習支援の記録です。ぜひ御自由に持っていていただけてご覧いただけたらなというふうに思います。

以上で報告を終わります。御清聴ありがとうございました。（拍手）

○司会 ありがとうございました。

それでは、ただいまの報告について、フロアから御質問や御意見、あるいは御感想をいただきたいと思えます。いらっしゃいますでしょうか。

マイクを回しますのでお待ちください。

よろしければ、御所属とお名前を頂戴してから御発言をお願いいたします。

○質問者 札幌大学の小山と申します。非常に楽しく聞かせていただきました。

私どもは、子どもの食堂とか、小学生に教えるというのを今やっているのですが、中学校3年生ということで、新陽高校の荒井校長先生、結構有名な先生がいますけれども、彼が言っていたのは、算数がわからなかったのは小学校4年生ぐらいなので、中学校3年だともう、多分、先ほど言われたように初級、中級、上級と分けると、お話に出ている14名いらっしゃって、どういう分類なのかかわからないのですが、その分類の仕方と、あとは一斉授業と個別授業、非常に人数も手間もかかっている、なおかつ、1週間に1回なのではないかと、多分そのぐらいのペースではないかと思うのですが、そのぐらいであると、恐らく中3ぐらいの数学レベルで、あまりできない子だとかなり大変になってしまうのではないかなという気がして、そこら辺のできる子とできない子、初級のほうをどうモチベーションを上げているのか。逆に言うと、さっき言ったように4年生ぐらいから戻らなければいけないのではないかなという気がするのですけれども、そこら辺の対応をどうしているのかということが一つです。

あともう一つ、成果なのですけれども、多分これやって、数学の成績が5になるとか、そういう成果があるとか、あるいは逆に言うと、一つレベルの上の高校に行けるようになるとか、そのような成果というのはもう、15年からやられているので、そろそろ出ているのかなという気がするのと、あと、高校まで行くというときに、高校生までやる必要があるのかということで、実際にこの授業で、中3で教えた子供たちが、数学が楽しくなったら、自分で参考書とか、そういうのは多分幾らでも勉強できると思うので、そういうものを利用して自分で勉強するという体制づくりにできないのでしょうかというのがちょっとありまして、そこら辺の対応についてどう御検討されるかということをお伺いしたいと思います。

○石尾氏 まず、初級の教え方に関しましては、単元ごとで、火曜日の1時間半ぐらいを使ってやっているのですが、そこで初級については、本当に単元の一番最初から始める。もしそこからわからなかったら、中3の内容なのですけれども、中1、中2に戻る。わからなかったらその前からという形で、どんどんどんどん前からさかのぼって行って現在につなげていくという、本当に基礎の基礎から始めるということをやっています。特に、初級コースは、やっていることとしては、計算問題が結構主なのですけれども、そこに関しても、例えば、公式を使わないと解けないとかもあると思うので、それについては、公式を覚えさせるというのは、我々としても無理やり感がちょっと出てしまうので、なるべく、こういう構造だよとか、そういう基礎的なところから教えてあげるといった取り組みを、特に初級は行っています。初級、中級、上級としても、単元の基礎と、大体その基礎を使ったら解けるかなというのを中級にしている、上級はできるだけ応用問題を扱ってやっています。

このような感じで大丈夫でしょうか。

二つ目に関しましては、自分の勉強とか成果が出ているかということなのですが、毎年、中学3年生を対象としていますので、目標としている高校、そこに向けての勉強として我々も一応行っています。今までは先輩方の成果としてもかなり、数学が少し好きになったとか、そのぐらいの成果が挙げられています。今、前期が終わった段階で、生徒にもアンケート調査をして、結構好きになったとか、ここができるようになってよかったというのかなり出ているというのが一つあります。

自分の勉強についてですが、数学教室が終わった後に家庭学習でしっかりやるというのも今何人か出てきていますし、こちらとしては、好きになってもらう、できるだけ数学の苦手意識ではなくて、少しでも数学になじんで、学校の数学の授業でも頑張ってみようとか、まずモチベーションとして、そこに向けて教えてあげているところなので、勉強についても、できるだけ家庭学習でもやりやすいような、こちら教材づくりとか問題づくりをしているという形をとっています。

○司会 ほかにございませんか。

ほかにないようでしたら、次の報告が終わってからもう一度、質疑、感想をいただく機会も設けますので、第2報告はこれで終わらせていただきます。(拍手)

第3報告

○司会 それでは、口頭報告最後となります。第3報告は、田村龍一准教授と田村真理子メディア表現指導員、学生3名による「まちラボを拠点とした学生と市民の学びの交流」について報告いたします。

では、お願いいたします。

○田村(真)氏 それでは、まちなか振興支援室より発表をさせていただきます。まちラボ常駐スタッフの田村と申します。

本日は、「まちラボを拠点とした学生と市民の学びの交流」をテーマに、今年度より始めました三つの講座について御報告をさし上げたいと思います。

まず、まちラボですが、稚内駅の近くにありますが中央商店街にある本学のサテライト施設になります。こちらが内部の様子です。ここで中心市街地の活性化を目的に、平成27年4月より活動を行ってまいりました。

今年度のまちラボでは、「本学と市民のアカデミックな交流の促進」、これを重点目標に挙げております。アカデミックな交流というのは一体どういうものかと思われるかと思いますが、二つ考えております。一つが、市民の方に講師になっていただいて、学生に知識や経験をお話しいただくというものです。こちらは「商店主セミナー」という形で実施をいたしました。もう一つは、学生が講師となって市民の方に知識を共有するというものです。こちらは本年度、「おもてなし English」という観光英語のクラスと、あとは「中級 Excel」講座という二つの講座を実施しております。



私のほうから、「商店主セミナー」について簡単に御説明をさせていただきます。

商店主セミナーというのは、その道の専門家である商店主の方に講師としてお招きしまして、専門的な知識ですとか技術を教えていただくというものです。第三セクターのまちづくり稚内様と共同で事業を行っております。

第1回目ですけれども、9月27日に開催されました。講師に為安印舗の代表取締役為安欣平様をお招きしまして、為安様のほうから、印鑑の歴史ですとか印材ですね、あとは印鑑の字体ですとか、三文判と認印というのはどう違うのかですとか、印鑑職員の技術などについてお話をいただきました。

また、為安様ですが、明治創業の老舗でいらっしゃるということで、中央地域の移り変わりですとか変遷などについても非常に興味深いお話を聞かせていただきました。

参加した学生からは、「印鑑のさまざまな知識を教えていただき、大変貴重な体験でした」「歴史あるお店のお話が聞けて大変興味深いセミナーでした」「印鑑の奥深さに触れ、印鑑に対する認識が変わりました」といった感想が届いております。

商店主の方に講師になっていただく意義というのは2点あると考えます。1点目は、長年、御商売で御活躍されているその道のプロの方に直接お話を聞けるというのは、大変貴重な機会だと考えます。もう1点ですけれども、特に学生にとって、自分の暮らすまちの商店街の歴史を知ること、自分のまちを見直すよい機会になるのではないかと考えております。

こちらの商店主セミナーですけれども、今年度、後期も引き続き継続していきたいと思っております。第2回は12月1日を予定しております。また、メルマガですとかフェイスブック等で告知をしておりますので、こちらは学生以外の方、一般の方でも御参加いただけますので、たくさんの方に御出席いただければと考えております。

商店主セミナーについては、私から以上になります。

続きまして、「おもてなし English」について説明をさせていただきます。

こちらの講座でティーチングアシスタントを務めております、本学2年生のスペディ・ラメシュ君からお話をいただきます。そして、その後ですが、こちらの「中級 Excel」講座の講師を務めております、本学2年生の前原颯君と板谷瞭君のほうから御報告をさし上げたいと思います。

○ラメシュ氏 皆さん、こんにちは。スペディ・ラメシュと申します。稚内北星学園大学情報メディアコースの2年生です。プログラミングを勉強しています。

まちラボで開催されている「おもてなし English」クラスのティーチングアシスタントを務めております。きょうは、おもてなし English クラスにおける、英語の学習を通じた市民の方々との交流についてお伝えいたします。

まず初めに、ティーチングアシスタントとして、講座にかかわる機会を与えてくださった先生方にお礼を申し上げます。

稚内に暮らす外国人留学生として、日本語を学ぶだけではなく、私に市民と交流の機会があればと思っていましたので、私にとって大変貴重な経験となりました。また、先生方にも講座のモチベーションを高めていただきました。ありがとうございます。

講座の概要についてお伝えします。

おもてなし English クラスは、2018年5月からスタートしました。月に1回で、計5回のクラスで、2クラスで合わせて15名が学んでいます。最後のクラスは10月20日に終了しました。

クラスの目的は二つあります。一つは、稚内を旅行している外国人観光客を英語でもてなし、稚内の滞在を楽しんでもらうことです。もう一つは、その際にさまざまな文化に配慮したサポートをすることになります。

次は、講座の内容についてお伝えします。

講座は、最初は前回の復習から始まります。次は、テキストをもとに会話表現を学びます。次は、会話に出てきた表現とか大切な言葉をもっと練習して、リスニングのために私たち外国人から英語でプレゼンをします。また、宿題も出されます。

講座の成果についてお伝えします。

最初は英語がなかなか話せなかった人も、コミュニケーションの力が向上しました。受講生の中には、旅先で外国人と積極的におしゃべりをしたり、外国人観光客に道案内をしたり、9月の停電のときにも、困っている外国人に、キタカラに出向いてアコモデーションのためにサポートした人もありました。

受講生の皆さんの学ぶ姿勢はとても積極的で協力的でした。そのため、英語を教えて理解してもらうことはそれほど難しくありませんでした。

講座に感じたことをお伝えします。

稚内市民の皆さんにネパール文化やネパール人留学生についてよく理解してもらったことがありました。講座を通じてたくさんの市民と知り合うこともできました。その講座は、大学にもとてもメリットがあると思います。学習の知識や研究成果を市民の皆さんと共有するプラットフォームになり得ると思います。

講座の改善点が三つあります。一つは、もっとたくさんの市民に参加してもらうことです。もう一つは、日本人学生もその講座で学習するために参加すべきだと思います。COC事業が終了した後も、大学でその事業は継続するとういと思います。

おもてなし English クラスについては、これで以上になります。ありがとうございました。（拍手）

○板谷氏 次に、「中級Excel」講座の発表ということで、改めて、情報メディア学部2年の板谷瞭と。

○前原氏 同じく情報メディア学部2年の、私は前原颯です。どうぞよろしくお願ひします。

○板谷氏 まず、私たちが中級 Excel の講座を引き受けた際の理由として、二つ、Excel のよさをもっといっぱい知ってもらい活動になると、自分自身のさらなる知識の定着につながると思ったから、二人で受けました。もう一方で、Excel の一般的な需要というのは、実際の日常でどの程度あるのかというのが気になったから活動しました。

○前原氏 次に、これが実際につくった課題ですね。これを解きながら関数を覚えていくということをしました。

○板谷氏 次に、教材準備段階で気をつけたことで、3点ほどで、全てのことを前から準備して資料とかにつくっておいたのと、テーマというのを、中級レベルということで意識してつくりました。あとは、ゆっくりゆっくりやっつけていこうと思いました。

○前原氏 次に、リネームなのですけれども、初級レベルと、初級レベルはSUMとかCOUNTとか基本的な関数で、中級レベルがSUMIFとか、少し難しいやつですね。これは高校の情報処理検定2級を参考にしています。

次に、これが講義資料というのをつくったのですけれども、その内容ですね。主だったのは、ROUNDUP関数とWEKDAY関数を紹介しています。

その日程が9月1日の2時から3時30分と、9月20日の2時から3時30分までで、1回目は普通の関数で、2回目がピボットテーブルとかグラフの作成とか、そういうことをやりました。

これが受講者数、ログインですね。1回目のときで、これが、2回目のときは3名でした。

これはホワイトボードに書いている様子です。

役割が、僕は、今見てもらったとおり、ホワイトボードを使って板書しました。そのときに、それを見ることができるように、わかりやすくすることを心がけました。

○板谷氏 僕は、受講者さんのそばに寄り添って、一緒にやっていく感じでやっていきました。

○前原氏 最後になるのですけれども、やってよかったと思うところは、一般の人の需要について、身をもって今回体験できたということですね。あと、Excel 講座をやることで感謝してくれたときが一番うれしかったです。一般の人の需要は、受講者さんには、例えば、こんなこともできたりするのとか聞かれたりはするのですけれども、日常のデータということに対して、効率的に処理したいと希望する人がいるということがわかったということですね。

これを見たら、お土産と書いているのですけれども、お土産は宿題みたいな感じで、復習できるようなプリントを配付すれば、1回目も2回目もできなかったのですけれども、配付すればよかったということですね。そうすることで知識の定着率につながるのではないかと思います。

○板谷氏 最後に、Excel 公開講座の活動を通して、もっと受講者、市民の方の抱えている日常の問題や課題というのを、我々大学側が寄り添ってともに解決していくことがもっとできるのではないかなど、今回の講座を通して感じられました。

今回でいえば、受講者の中に Excel に触れて勉強したいという者や、Excel を使ってデータを効率よく処理したいという、いわばわからないと感じている人や困っている人がいるという事実で行われました。今後はもっとこういった活動を通して、皆さんの課題を解決していくべきではないのかなと感じました。

今回の Excel 講座に限っては、受講者のためにも、よく成功したものだなと感じられました。

以上で発表を終わります。(拍手)

○田村(龍)氏 学生の皆さん、どうもお疲れさまでした。

私が最後になりますけれども、このまちラボの室長を務めさせていただいております、田村龍一と申します。まとめとしまして、きょう、田村真理子さん、ラメシュ君、板谷君、前原君が発表されたところ、これの意義についてちょっと御説明させていただきたいなと思ひまして、最後、簡単に登壇した次第であります。

まず、田村真理子さんが説明したように、商店主セミナーというのは、基本的には、こういう中央商店街の歴史を担う経営者という方が稚内市にはいるわけですね。歴史のある商店街です。学生は基本的に座学で、大学等で勉強しております。やっぱり実学的な知識やノウハウを、大学にいなながらこういう形で学ぶ機会があるというのは、あそこにまちラボが、中央商店街にあったからこそ、比較的容易に実現できたのではないかというふうに思っております。

逆の方向ですね、本日、学生さんが発表していただいたところですね。もともとは、例えば、おもてなし English、英語クラスですね、あと Excel クラス、両方とも市民の皆さんから要望が強かったトピックの、よく電話とか、これないの、あれないの、できないのみたいな要望の多かった、ニーズの結構高かったものだったのです。我々がそれを把握して、英語と IT、Excel みたいな IT 技術だったら、うちの大学の学生のスキルで、もしかしたら解決できるかもしれないということで、今回、ラメシュ君と板谷、前原両君に参加をお願いしたというか、どう、やってみないと言ったところ、非常に積極的にやります、やりますと。私たち、はっきり言って教材とか全然ノータッチでやっていましたけれども、Excel に関しては、まだ彼らの教材も半分程度しか終わっていない。まだ残り半分ありますので、まだまだ充実した Excel の旅が楽しめると思います。

そういう形で、学生のスキルでこういうのを解決する。こういうことこそ我々がまちラボでやってみ

たかったことであります。なので、基本的には、こういうまちラボを通して、学生が積極的に市民と、教える側、教わる側として交流をするというようなことが大事で、こういうことを続けて、市民の中で、しゃべる能力とか、そういうのを養うことで、最終的には、先ほど板谷君が言っていましたよね、身の回りの地域の課題を解決するような、そういうスキルが伸びていくのではないかと期待しております。もちろん地域から要請を受けたものをのんびりやるわけではない。我々の教育というのは、地域の要請とはまた独立になります。むしろ地域のニーズを我々の教育の手法で見出すというのが、我々、教員にとっては必要なわけです。なので、今回はこちらのほうも、こういう地域課題の解決策を提案するような中で位置づけられるのではないかと思います。

今後も学生主体のイベント等、たくさんやってまいりますので、まちラボに来ていただくこともとてもうれしいですが、フェイスブックもございますので、見ていただきたいと思います。

本日はどうもありがとうございました。（拍手）

○司会 ありがとうございます。

それでは、ただいまの報告について質問や御意見、あるいは御感想をいただきたいと思います。いらっしやいますでしょうか。

マイクをお持ちしますので。

○質問者 何度も済みません。札幌大学の小山ですけれども。

私も2004年ぐらいですかね、チャレンジショップというのが流行って、そういうことをやったときに、こういう Excel のほうですけれども、やったのですよね。実際にテキストみたいなのをつくってやったのですけれども、要は、需要と合っていないくて、やっているうちにどんどんどんどん人がいなくなってしまったり、その時間に行けないわと逃げられてしまうというようなことが起こってきて、その後どうしたかという、個別にして、その人の課題とか、そういうので教えるよというので、大学院生とか4年生とかにやらせた経緯はあるのですが、本当は商店街の人たちに、手書きで帳簿をつけているような人たちに Excel でやらせるだとか、今はソフトもいっぱいあるのでそういうのも必要なのか。あるいはエアレジとか、ああいうのもありますから。そんな時代に Excel を本当に利用されるのかなということで、先ほどちょっと需要のことのお話があったのですけれども、実際に Excel を活用する機会とか頻度とか、そういうのを調べられたかどうか、ちょっとお答えいただきたいと思います。

○田村（龍）氏 まず、この講座自体は中級ということで、実は、うちのまちラボのコンテンツとして、初めての Excel という講座も、今、レギュラープログラムとして動いております。そこで少し飽き足りない、もう少しチャレンジしてみたいという話が来たので今回彼らに設けたところで、初めての Excel のところを見ると、実用とか、もちろん実用性を出口としてはにらんでいるのですけれども、どちらかというと、学ぶこと自体が興味深いかなど。Excel の操作を学んでいくところがおもしろいという、そこでいいかなど。だから、そういう層が参加しに来ているわけなのですけれども、会社とかでしたら財務会計とか専門のソフトがあるので、やっぱり Excel、今まで書類しか使っていなかったのもう少し深いところを探ってみるといったら結構おもしろい、グラフができれば結構おもしろいという、知的好奇心を満たすための形で今回やっているというのが今のところの状態だと思います。

○質問者 そうすると、ちょっと我々も公民館だとか、そういうところの初級講座、中級講座、プロの人が教えているやつがあって、あるいはパソコン教室というのが当然あるのですけれども、その中で実際にどこまでこちら側が教えていっちゃって、実際に民間の人たちがやっている中で、多分、Excel 講座はただでやられていると思うのですが、そういうふうになってしまうと、民業圧迫のような感じだと思うのですね。少しあったりするということで。公民館クラスであれば、地域のパソコンの先生が公民館で教えるというような形の形態をとっているのです、そんなにあれではないかもしれませんが。イメージとして、稚内北星学園大学さんが独自の Excel の教え方というか、民間ではやらないような切り口なのか、そういうのというのがもしあれば、多分、非常におもしろいと思うのですけれども、こちらはどうお考えでしょうか。

○田村（龍）氏 やっぱり学生が学びながら、教えながら、教えることで学ぶみたいな、そういう機会というふうに捉えていただけたら。決してプロフェッショナルなわけではないというところで。学生も試行錯誤して、受けている受講者の方々から、ちょっとこれどういうこと、あれどういうことというところで、少しずつ改善していくみたいな、そういうチャレンジのところかなという。そこに置かれるというのはやっぱりちょっと、住むワールドが違うのかなと、プロの方とは違うのかなというふうに思っております。

○司会 ほかにございますか。

マイクを回しますのでお待ちください。

○質問者 市議会の中井と申します。

大変興味深く聞いていたのですけれども、制度としてはことしで終わってしまうことだということで、このまま消えるのは大変残念で。例えば、田村先生がおっしゃったように学生ということの趣旨も踏まえた上で、市民講座と連携していただとか、そういう発展的なことでやっぱり続けてはいただきたいのですけれども、そのあたりはどういうふうにお考えになっていらっしゃるか、一言伺いたいです。

○田村（龍）氏 既に、私どもまちなか振興支援室では、今行われているコンテンツをCOC終了後にどうやって引き継いでいこうかという、今もう既に、その検討の段階に入っていますので、とりあえず、現在のプログラムに関しては、なるべく、例えば大学に移すとか、また別の組織のオフィスを借りたりとか、例えばキタカラの2階を借りたりとか、そういう形で発展的に、市民の皆さんが、今まで受けてくださっている方々が迷わないようにやろうとしているというような段階にはなっております。

○司会 ほかにございますか。

ないようでしたら、第3報告はこれで終わらせていただきます。（拍手）

本日予定しておりました口頭報告3件を終えました。何か聞き逃したことですとか、コメント等がありましたら、ぜひお願いしたいのですけれども、いかがでしょうか。

よろしいでしょうか。

それでは、ぜひプログラムに入れておりますアンケート用紙に御記入をいただければ幸いです。

特にないようでしたら、ポスター報告に移りますので、口頭発表はこれにて終了とさせていただきます。

最後に、本学COC事業推進責任者である佐賀孝博副学長より閉会の御挨拶がございます。

お願いいたします。

○佐賀副学長 COC事業推進責任者の佐賀と申します。本日は、お忙しい中お集まりいただき、誠にありがとうございました。

ここ数回の報告会については、司会のほう、いつも学生にやってもらっていたのですけれども、特に留学生にとということで、きょうはユバズ君にやっていただきましたけれども、多分、緊張したと思うのですが、務めていただいてありがとうございました。お疲れさまです。

また、本日、教員とともに学生のほうに発表を行っていただきましたけれども、それぞれが活動を行ったことを通じて感じたことなど、さまざまなことがあったと思いますが、率直に語ってもらったかなというふうに思っています。発表にあったとおり、いろいろな成果もありましたし、あるいは、今後に向けての課題等もあったかと思っておりますけれども、いずれにしても、この活動を通してワンランク、ツーランク、学生自身もレベルが上がっていったのではないかなというふうに思っております。今後の学生生活でもぜひ、これらの活動を生かして、さらなる自身の成長につながることを期待しているところです。

今回、COC事業としての地域活動報告会、最後というふうになってしまいますけれども、今後も、形式は変わるとは思いますが、学生の成長の場を皆さんに報告できる場というのはつくっていきたいというふうに思っておりますので、引き続きよろしくお願いたします。

これら活動については、まさに地域の御協力がなければできないことばかりですので、今後も御支援、御助言等をいただければ幸いです。よろしくお願いたします。

なお、本日14時から、COC事業の総括シンポジウムを開催いたします。こちらのほうもお時間がございましたらぜひ御参加ください。

また、ふだんは土曜日に食堂は開いていないのですが、ちょっと時間もあるということで、食堂のほうを開いております。定食はメニューがそれほど、数が限られているということですが、そのほかのメニューもございますので、ぜひ御利用いただければと思います。場所のほうは、3階の渡り廊下を渡っていただいて、本館と呼ばれる別棟になりますけれども、その2階の奥ということで、そちらの御自由におとりくださいのところ学内の見取り図がありますので、そちらをご覧くださいか、あるいは教職員のほうにお聞きになっていただければというふうに思います。

本日は、御参加いただき、まことにありがとうございました。この後、ポスターセッションがあるので、教員も待ち構えておりますので、ぜひ足をとめて見ていただければと思います。

本当にありがとうございました。（拍手）

○司会 ありがとうございました。

本学は、これからも地域をフィールドにして研究、教育活動を行ってまいりますし、大学の取り組みを通じて地域に貢献していきたいと考えています。地域の皆様の御支援や御協力をいただければと考えています。よろしく願いいたします。

この後は、ポスター報告として自由解散とさせていただきます。お帰りの際、アンケート用紙の提出に御協力ください。

本日はありがとうございました。（拍手）

3. ポスター報告(報告資料)

ポスター発表 1

○ 報告者

浅海 弘保 (情報メディア学部 教授)

ゴータム ビスヌ プラサド (情報メディア学部 教授)

安藤 友晴 (情報メディア学部 教授)

佐賀 孝博 (情報メディア学部 教授)

○ 報告題名

Open Source Portfolio(OSP)の matrices 機能を利用した評価システムの開発および地域の学習者の学習成果物とコンピテンシーとのマッピングによる目標達成度の評価

○ 報告内容要旨

次世代 e-Learning システムにおいて、学習者の学習の自己調整を可能にする仕組みを導入し、コンピテンシー、ルーブリック、学習成果、学習ポートフォリオ等の相互相関を見出し、抽出するべく、ルーブリックの策定およびコンピテンシーと学習成果、学習プロセスの記録等の多次元マッピングを行い、Project Based Learning における学習意欲の向上に起因する要素を探る。本ポスター発表では、システムへの導入について、その進捗状況を報告する。

ポスター発表 2

○ 報告者

澁谷 久 (情報メディア学部 教授)

但田 勝義 (情報メディア学部 教授)

○ 報告題名

地域、対象に対する拡張を生む「移動式数学博物館」の有効性に関する実践的研究

○ 報告内容要旨

数学にかかわる内容を展示用に加工したものを、参加者に観察・体験させる「移動式 数学博物館」の有効性を、道北地方 2 市、1 町における公立図書館での実践により検証する。2017 年度地域志向研究における「マス・フェア」に比べ、展示件数を増やし、説明の表示を充実させ、展示性を高め、数学の面白さを可視化したものを間接的に示すことにより、広域の地域住民のノンフォーマルな学習による数学に対する興味・関心の醸成を目指す。

ポスター発表3

○ 報告者

小泉 真也 (情報メディア学部 教授)

○ 報告題名

ET ロボコンから、宗谷で何が始まるか

○ 報告内容要旨

2018年、日本の組み込みソフトウェア業界において、技術競技の最高峰たる「ET ロボコン」、その北海道地区大会が、稚内市で初めて開催された。

「ロボコン」は、技術研鑽の場であるだけでなく、一個のイベントであり、それぞれを成す人的および地域資源の開発、また、教育やビジネスへの創造と、このたびの実施経験が滴下したものは、地域の宝として醸成していくことが肝要である。本件は、発表者の地域思考研究テーマのプレビューとして、「ET ロボコン」は何をもたらすか、を論じる。



※各報告に関するポスターは、付録にて掲載

4. 総括シンポジウム講演録

<第1報告：わくほくメディアラボ>

○報告者

ガオ シュウ (わくほくメディアラボ 学習コンシェルジュ)

安藤 友晴 (情報メディア学部 教授)

○報告題名

学習コンシェルジュの配置と学修成果

○報告内容要旨

本発表では、学内ラーニングcommons「わくほくメディアラボ」(通称「わくらボ」)設置当初の目標、およびこれまでの4年間で行われてきた活動のいくつかを紹介する。中でも特に、学生のリテラシー能力向上を目指し、「学習コンシェルジュ」が中心となった事例とその成果を報告する。

<第2報告：地域教育支援室>

○報告者

杉浦 健太 (情報メディア学部 3年)

米津 直希 (情報メディア学部 准教授)

○報告題名

地域の教育力向上と学生の学び

○報告内容要旨

地域の教育向上の取り組みとして、特に学生と行ってきた学習支援活動について、そこでの学び、現状、課題について報告する。これまでの成果もし確認しつつ、今後の展望について検討する。

<第3報告：地域観光支援室>

○報告者

ゴータム ビスヌ プラサド (情報メディア学部 教授)

ユバラズ ゴータム (情報メディア学部 4年)

アスタ センチュリー (情報メディア学部 4年)

伊藤 良平 (情報メディア学部 4年)

ブン スミット (情報メディア学部 3年)

○報告題名

STPF との連携におけるインバウンド強化に向けた情報発信の取り組みと今後について

○報告内容要旨

観光「立国」宣言した日本は、2020年までに4000万人のインバウンド観光客数を目標としている。そのなかで、我々は宗谷地域のインバウンドツーリズムを推進する目的で、未来STPF観光アプリの現状を踏まえ、このプロジェクトに取り組んできた学生の情報発信活動やアプリ開発の現状と今後の課題について発表する。

<第4報告：まちなか振興支援室>

○報告者

田村 龍一（情報メディア学部 准教授）

○報告題名

まちなか振興支援室の活動が中心市街地にもたらしたものの

○報告内容要旨

4年間にわたる稚内市中央商店街「まちラボ」での活動を総括し、まちラボでの活動を総括し、まちラボ設立当初の具体的な目標がどのように、どの程度達成されてきたかを説明する。究極の目標である中心市街地の再生・活性化に向け、本学として今後どのような行動が必要になるだろうか。この点について振興支援室および学生の立場から将来的見通しを行い、みなさんと議論を行う。

<公開座談会>

○登壇者

稚内市まちづくり政策部 部長 川野 忠司氏

稚内市教育委員会教育部 部長 渡邊 祐子氏

稚内北星学園大学 学長 齊藤 吉広

○シンポジウム座談会テーマ

COC 事業の成果と評価

○座談会要旨

COC 事業の柱である、①地域の教育力向上、②観光まちづくり、③中心市街地活性化について、連携自治体で行ってきた活動を振り返るとともに、活動の評価および今後の展望や期待について意見交換することで、改めて地域における本学の貢献やあり方について議論した。

座談会はまず、齊藤より本学のCOC事業の取り組みを新聞記事で振り返り、その中でも教育や学生による映像制作に関する取り組みを中心に渡邊部長、川野部長にそれぞれコメントをいただいた。また、その後事前に配布したフロアからの質問・意見用紙の内容について取り上げた。多くのコメントは、本学の取り組み、特に学生によるものに関してお褒めいただくものであった。他方で、今後どうするのかという意見・質問もありその点については様々な方法で残していきたいという話になり、その中で稚内市と連携していければということとなった。

開 会

○司会 それでは、時間となりましたので、これよりCOC総括シンポジウムを開始いたします。

私は、本日司会を担当いたします稚内北星学園大学COC事業推進室長の石橋と申します。本日は、どうぞよろしく願いいたします。（拍手）

開会挨拶

○司会 まず初めに、本学学長の斉藤より御挨拶申し上げます。

○斉藤学長 こんにちは。

本日は、お休みのところ足をお運びいただきまして、まことにありがとうございます。

また、日ごろの御支援、御協力、ここで改めて感謝申し上げます。

大学には、7年に1度、ちゃんとした大学であるかどうかを評価される認証評価制度というものがあります。昨年、2度目の審査を受けた際に、現地調査に来た代表者からまず言われたことは、こんな小さな大学があること、そして、こんな小さな大学がCOC事業に認定されていることにとっても驚いたという言葉が最初にいただいたわけです。

高等教育機関（大学、短期大学、高等専門学校）は、全国に1,210校あります。そのうち2013年度、2014年度の2回のCOCの募集で採択されたのは82校で、わずか6.7%です。実際に応募したのは588校でしたが、それでも倍率は7倍強という狭き門でした。

確かに、私たちは規模のパワーは持っていません。しかし、こんな小さな大学だからこそ全学的に取り組むことができましたし、地域との連携を密に行うことができたのだというふうに自負しています。

また、稚内・宗谷地域に存在する大学が、ここ稚内北星学園大学だけだからこそ、地域の方に本学及び本学学生が頼りにされて、活躍する場を広げることができたのだというふうに思います。きっと、そうした可能性を見込まれて選ばれたのだというふうに考えています。

1987年、およそ30年前に、「この地に高等教育機関を」という地域の方々の熱意によってつくられた稚内北星学園は、地域に貢献する人材の育成ということを建学の精神にして、実際に多くの有為な人材を地域に送り出してきました。そして、COC事業に取り組むことによって、より積極的に、より日常的に地域と関わるできるようになりました。

「大学、いろいろやってるね」、「学生頑張ってるよね」といった声に励まされながら、当初、COC事業としては想定していなかったようなことも自発的に新たな取り組みが生まれて、そうした中で地域とのつながりもさらに深まって、そうした中で学生たちは大いに成長しています。

午前中に行われた地域活動報告会では、まちを教室にして行ったCOC活動に関して、学生の最近の実践例を中心にして報告がなされました。この午後のシンポジウムでは、この5年間のCOC事業全体をどう総括するのか、そして、事業補助がなくなる来年度以降、これまでの経験をどう生かし、発展させていけるのかということを議論し、共有していく場になりたいと思っています。

学内はもとより、地域の方々、また、遠く旭川、札幌、室蘭からお越しいただいた方々にも積極的に参加していただけますようお願い申し上げます、開会の挨拶といたします。

本日は、最後までどうぞよろしく願いいたします。（拍手）

○司会 ありがとうございます。

第1報告

○司会 各成果報告を始める前に、本日の配付資料の中にアンケートがございます。こちらは、本学COC事業につきまして、御質問、御感想、学生への激励等ありましたら御記入ください。

また、本アンケートは、本日の公開座談会で紹介させていただく場合があることをあらかじめ御承知おきください。

そのため、成果報告終了後の休憩時間に回収させていただきます。

それでは、早速、発表に入りたいと思います。

まず、わくほくメディアラボからの報告です。

発表者は、学習コンシェルジュの高シュウ、情報メディア学部教授、安藤友晴。

発表タイトルは、「学習コンシェルジュの配置と学修成果」です。

それでは、よろしくお願ひします。

○安藤教授 皆様、こんにちは。稚内北星学園大学の安藤友晴と申します。

私たちは、これから「わくほくメディアラボ」という、このCOC事業を通して学生の学習支援を行ってきた組織がございます。その成果報告について、この場で御報告させていただくことになります。

まず初めに、私のほうから、この「わくほくメディアラボ」を構想したときに、これは何を指して「わくほくメディアラボ」というものをつくったのかといったようなお話をさせていただきまして、その後の実践例を学習コンシェルジュの高シュウより御報告いたします。そして最後に、もう一度私のほうからまとめをさせていただくという流れで入らせていただければと思います。

では、最初に、「わくほくメディアラボ」の当初計画について御説明申し上げます。

そもそも、まず「わくほくメディアラボ」というのは、本学、こちらは新館と呼んでおりますが、向こう側の建物を本館と呼んでおります。その1階にある施設の名称になっております。そこが学生のアクティブラーニングを支援するための施設という位置づけになっているのですが、まずその部分について御説明いたしますと、地域志向科目と言われる大学の授業科目がふえてきたということが一つの大きな要因となっております。

ここで、地域志向科目とは、簡単に御説明いたしますと、地域で学ぶ科目、あるいは地域を学ぶ科目、こういう科目のことを地域志向科目と私たちは呼んでおります。

もともと私たち稚内北星学園大学は、この道北宗谷の人々の願いのもとでつくられた大学ということもございまして、地域に根差した大学というのを目指しております。そのため、おのずと、この地域志向科目のような科目は多くなっているのですけれども、その後、COC事業に採択していただきまして、この地域志向科目を一層強化するという流れになりました。

そして、「地域に学ぶ」ということになる、これはおのずとまちに出ていったり、いろいろ自分で調べたり、何かまとめたり、発表したりという学習形態がふえてきております。一般に、こういう学習の仕方をアクティブラーニングという言い方をいたしますが、このアクティブラーニングの機会が飛躍的に増加するということになります。

あるいは、それが単独の学生だけではなくて、学生がグループになったような、そういった機会もふえていくと。

ここで、学生のアクティブラーニングの支援をどのようにするのかということが課題になってまいります。単純に言いますと、指導に手間暇がかかるということがございますし、あるいは、これは場所の問題なのですけれども、学生が討論をしたりとか、何かいろいろな作業をしたりとか、パソコンを使ったりとか、発表したりということを、通常ですと、これをそれぞれ別々の場所でやらなければならないものを一つの場所で一貫してやることができると望ましいよねということで、その結果、この「わくほくメディアラボ」というものを設置いたしました。

この「わくほくメディアラボ」という施設は、大学の世界では一般にラーニングコモンズと言われる施設です。ラーニングコモンズというのは何だというのは、実はこれから御説明するものがラーニングコモンズと言われるものなのですけれども、基本的に学生のアクティブラーニングを支援する空間であると。グループ学習みたいなものに対応して、そこで先ほど出てきたようなことができるようになります。

そして、次に、人による学習支援を重視すると。その学習支援のための専属スタッフを配置いたしま

して、その人にいろいろと支援をしていただくと。その学習支援のスタッフを、我々のほうでは「学習コンシェルジュ」という名前を使うことにいたしました。

このあたりが当初計画ということになります。

実際に学習コンシェルジュとして、これから発表いたします高シュウが本学にやってまいりまして、さまざまな試行錯誤の末、現在の「わくほくメディアラボ」の姿のほうに入っていたのですが、では、その内容につきまして、これから高シュウより御説明申し上げます。

○高氏 皆さん、改めて、こんにちは。学習コンシェルジュのシュウです。

発表が始まる前に、ちょっと簡単な自己紹介をさせていただきたいと思います。

名前を言ったとおり、私は中国出身で、4年前に大学院を卒業して、学習コンシェルジュとして稚内北星学園大学にきました。日本にいるうちの、実は半分以上は稚内で過ごしています。日本にいるような、いないような感じで毎日を過ごしています。

学習コンシェルジュについて、先ほど安藤先生の御紹介もあったように、学生の学習支援を目的として配置されています。具体的に言うと、学生が勉強に困っている部分、特に、ここ、赤い枠に囲まれているところを中心に指導しています。ふだんは主にレポートの指導とか留学生の支援、また、学生の個別対応などなどといった内容が主な仕事としています。

実は、留学生を含めて、本学部の学生の中の半分ぐらいがコンシェルジュを利用したことがあります。中でも一番よく利用されるのは、授業課題の部分です。留学生に関しては、言葉の関係で日本語の個別支援とかの指導をしたりしています。

実は、重要課題、2番目によく使われるのは、雑談、相談、悩みという部分なのですが、仕事と言っているのかどうか分からない仕事もしています。

ここでは細かく説明はできませんが、主にレポートの指導と学習講座、そして課外活動での学生サポートについて、どのような指導が行われて、どのような学習効果があったのかを説明していきたいと思います。

まず、レポート指導なのですが、先ほどお見せした学生の利用データの中でもお気づきかもしれませんが、学生はまだまだ積極的にコンシェルジュを利用する習慣が低いので、ここでは連携科目という取り組みの中でどういったレポート指導をやってきたのかを説明していきたいと思います。

まず、連携科目の狙いとしては、簡単に言うと、半強制的な形で学生にコンシェルジュの利用を促すような目的で取り組み始めました。

ここでは図書館情報拡大論という授業を事例にして説明していきます。

この授業との連携というのは、最終レポートを提出されて、そこで評価基準が満たしていない学生に対して、個別指導を一度受けた上に、もう一度提出してもらうような形をとっています。

具体的な評価基準は、スライドでは見にくいので、皆様、手元の配付資料の10ページ目をご覧ください。

中では、コンシェルジュとしての指導というのは、できるだけレポートの内容に触れずに、あくまでレポートの形、または文章表現とか文書の組み立てという部分を中心に指導しています。

結論から言いますと、指導を受けた学生の皆さんのレポートの点数が上がりましたよという結論にはなっていくのですが、数字だけだと見にくいので、実際に提出されたレポートの一部をお見せしながら説明していきたいと思います。

まず、レポート、例文1のほうなのですが、レポートの中の一部は、講義資料のままコピー・アンド・ペーストで提出した、引用の仕方が不適切になっているのがわかります。

指導後では、引用が明確に書かれるようになりました。

また、最後、参考文献で、その部分では、文書の中に引用し、それに応じた書き方の改善が見られました。

次に、例文2のほうの、ほんの一部なのですが、ここで読み上げます。

何々のネットワークサービスの定義によると、時に引用者の提示するような情報を正確に理解することが不可欠であるとある。そのために、図書館管理と利用者の話し合い、つまりコミュニケーション



ンが必要である、といった文書を学生が書いていたのですが、まず、引用の部分について、引用の範囲がすごく曖昧になっていて、どこが引用、どこが自分の意見かわからないような書き方となっていて、特に最後の「そのために」という文章も、どちらにも捉えられるような書き方となっています。

また、「時に」という文章も後ろが抜けていて、ちょっとわかりにくい文章になっています。

指導の結果は、まず引用の部分と自分の意見の部分、ちゃんと区別してわかるようになりました。

先ほどの文章、続きも見ていきましょう。

その次の文章は、図書館司書の仕事は何々、仕事であるという表現の重複という点とか、また、後の文章も、幾つか論がねじれていて、非常にわかりにくい、文章の趣旨が伝わりにくいといった問題点も見られます。

実際に学生の中では、ちゃんと読み返している文であれば気づくのに、自分自身があまり文章を読み返すという習慣が身につけていないので、こういった個別指導の中で一緒に何度も文章を読み返して、おかしい部分を学生に気づくように指導をしてきました。

結果としては、指導前と比べて文章は、引用での事実の部分から自分の意見、そして最後は結論に至るといった論理的な組み方になってきました。

ここではほんの少しの例文しか挙げられませんが、こういった個別指導を繰り返すことによって文章の形、または文章表現などで改善例が見られました。

そのほかには、先ほど話した、文章を読み返すことの大切さについてなのですが、実はたくさんの学生の文章の中で同じような問題点が見られます。なので、その大切さを個別指導の中で学生たちにしっかり理解してもらえるように指導してきました。

そういった指導ができる前提としては、連携科目の授業の内容とか、または授業の評価方法、あと受講の学生人数において大きく影響されるので、そこで、今後、連携科目をどう分別していくのかが今後の課題として残されています。

ここまでは個別指導によって見られた学習効果についてお話ししました。

5番については、全学年に向けた学習講座についてお話しします。

わくラボでは、わくラボ講座、サイエンスカフェなどを実施しています。わくラボ講座は、よりアカデミック的、例えばレポートの書き方、参考文献の書き方とかパワーポイントのつくり方、または英語力を鍛える目的として実施しています。サイエンスカフェは、学生にもっと気楽に勉強の楽しさを理解してもらうような企画で、昼休みの時間帯で実施しています。

ここでは時間の関係で詳しくは説明できませんが、ぜひ興味のある方は手元の資料、または右側に設置しているわくラボのコーナーをご覧くださいと思います。

これは、学習講座の実際の実施の様子になっています。

こういった学習講座を通して、下記のような効果が見られました。ただ、課題としては、積極的に参加する学生の数が限られているので、今後は、特にわくラボ講座は出前講座という形を追加して、各ゼミやコースに行き、実施する予定になっています。

6番についてですが、授業などに限らず学外で行われたイベントの中で、学習のサポートや、コンシェルジュが企画した活動について幾つかお話ししたいと思います。

その一つ目で、外部団体が主催するイベントの中で、学生が日本文化を紹介する部分に携わらせていただきました。その中で、相手は外国人観光客なので、学生が発表する英語のチェックとかもしていましたが、英語の完璧さより伝えようとする気持ちの大切さも学生に伝えました。

学生は、このような活動を通して実際に英語を使って外国人観光客とコミュニケーションをとることができました。

また、本学に留学生が多少在籍しているので、日本人と留学生の交流の場所を設けて、ロールプレイするなり、お互いの地元とか文化紹介といった異文化交流も行いました。

また、先ほどの外部団体の御協力をいただいて、留学生は着物で日本文化や稚内の歴史、ここは旧瀬戸邸なのですが、こういった企画にも携わらせていただきました。

最後に、中国語講座、あまり学生の学習サポートには直接に関係ないかもしれませんが、午前中の発表にもあった、まちラボという施設をお借りして、一般市民に向けて中国語や中国文化を少しでもわかってもらうようなきっかけとして継続的に開催しています。

ここまでは学習コンシェルジュの個別指導、または学習講座を通して見られた学習講座についてお話ししました。

まとめの部分は、もう一度、安藤先生のほうからお話ししたいと思います。

○安藤教授 というようなことをこの間、わくほくメディアラボとしてやってまいりました。

まとめということになりますけれども、当初、最初の僕のところの説明では、わくほくメディアラボという施設が、まず人による学習支援ということと、その学習支援をするための空間を用意するという、この2点について御説明いたしました。

まず、人による学習支援ということであると、シュウ先生のほうに来ていただいて、最初はなかなか学生の利用が十分ではないというようなこともあって、どうしたらもっといろいろな学生に活用してもらえるかということを中心に試行錯誤していたのですが、今はおおむね現在の姿に落ち着いています。

今の、この段階から考えると、当初考えていた学習支援のスタイルというのはある程度確立できてきたのかなと考えております。

ただ、一方で、予定外というか、当初は学習コンシェルジュが大学全体の学習プログラムを企画してということはあまりまだ想定はしていなかったのですが、そこがうまくいったことであるとか、あるいは特定の事業と密接に連携を持ってやっていくということが大体手法として確立したということが成果として挙げられるのではないかと考えております。

そして、先ほども言及がありましたが、これは当初から考えると、予定外といえば予定外だったのですが、たまたまシュウ先生が留学経験が多く、英語が堪能であったということもあって、留学生のサポートを非常に積極的に行っていただいたということ、それが発展したような話になるのですが、例えばこれが大学の中のインバウンド観光に対する対応の授業とか、そうしたことに大学として積極的に関与できるようになったということが、これは非常にポジティブな点として挙げられるかと思っております。

最後に、空間としてのわくほくメディアラボということなのですが、実は先ほど私のところで、例えば学生が議論したり、PCを使ったり、その場で発表したりということの一つの場で完結したいという当初の目的をお話ししましたが、これは少し残念ながら、そんなにうまくいっているとは言えないと思っています。というのは、PCの環境などが、数が十分にわくほくメディアラボに置かれていないとか、大学でふだん学生が使っている実習室の環境と少し違うとか、そうしたような理由もあって、どうして

も分断してしまうということがまだ見受けられております。なので、そこは改善が必要な点かなと思っているのですが、一方で、むしろ学生の居場所としてのわくほくメディアラボという位置はかなり確立できたかなと。だから、学生が何か、勉強以外の目的であっても、わくほくメディアラボのほうを訪れて、何かをしていくということができつつあるということです。あるいは、それがシュウ先生のところに相談に行くということも、そうした学生もふえてきておりますので、そういう意味での空間としてのわくほくメディアラボということもできつつあるという段階でございます。

COC事業、本年度で最終年度を迎えます。これからわくほくメディアラボをどのようにするかというのは、まだこれから検討するところであるのですが、基本的には今やっているようなスタイルをなるべく維持していくような形で進めてまいりたいと思います。改善するところは改善したいと思っておりますけれども、5年間やってきて、そのような結論に至っております。

では、私たちの発表はこれで終了させていただきます。

御清聴ありがとうございました。（拍手）

○司会 発表ありがとうございました。

質問等に関しましては、時間の都合上、ぜひアンケート用紙のほうに御記入いただければ幸いです。

第2報告

○司会 それでは、引き続き地域教育支援室の報告をお願いします。

地域教育支援室の発表で、発表者が情報メディア学部3年、杉浦健太君、情報メディア学部准教授、米津直希で、発表タイトルが「地域の教育力向上と学生の学び」です。

それでは、よろしくお願いします。

○米津准教授 皆様、こんにちは。地域教育支援室の米津と申します。

本日は、5年間の取り組みと成果につきまして、「地域の教育力向上と学生の学び」というタイトルで報告をさせていただきます。よろしくお願いいたします。

報告の流れですが、初めに私のほうから地域教育支援室の所管事業につきまして、ごく簡単ではありますが御紹介をいたします。次に、学生から学習支援活動を通して得た学びということで報告をもらいます。最後に、事業の成果と今後の展望について、再度私から報告をさせていただきます。

こちらが地域教育支援室の所管事業になります。主に学習支援活動とICT利用教育の支援に関する事業ということに分けられます。

本日の報告で扱う内容は、⑦と⑧の学習支援活動の取り組みになります。この区分自体はCOC事業の申請時の際の区分けですので、今行っている実際の枠組みとは少し異なるのですが、簡単に触れます。

まず、一番上ですけれども、稚内市の教育委員会で開催されているグングン塾、こちらに学生を指導員助手として派遣をさせていただいています。

それから、教たまゼミとありますが、本学の教師を目指す学生のゼミ、こちらで教たま数学教室というものを実施しております。

それから、利尻町、豊富町、猿払村の各教育委員会の方々と、共同と言って構わないと思いますが、事業として学習支援活動を行っております。

それぞれのごく簡単な内容は、受付で配付いたしましたお手元の資料をご覧くださいと思います。

それから、これらの学習支援活動は、教たまゼミ、先ほどの教師を目指す学生のゼミが主にゼミ活動として実施しているのですが、この内容を冊子「教たま」というふうにして1回発行しております。そちらは皆様の左手に、冊子「教たま」、現物を御用意いたしましたので、後ほどお持ちいただければと思います。

それでは、早速ですが学生の報告に移ります。

お願いします。

○杉浦氏 皆様、こんにちは。3年生の杉浦健太です。ここから発表を担当させていただきます。お願

いします。

初めに、報告の趣旨ですが、一つ目に、これまでの学習支援活動を通して学生が学んできたこと。二つ目に、その学んできたことが、将来、教師を目指す我々にとってどうかかわってくるかということ。最後に、現職の教員の先輩たちに、その学びがどう生かされているのかということもお聞きしたので、そちらもあわせてご報告させていただきます。

初めに、学んだことです。

学んだことについては、主にこの三つに分けることができます。

一つ目、入念な準備の重要性についてです。

二つ目、情報の共有の重要性についてです。

この1番と2番、準備と情報の共有をすることによって、三つ目の一人一人に合わせた対応につながっているということがまとめていてわかりました。

初めに、入念な準備について説明していきます。

まず、当たり前のことなのですが、教材等の事前準備ということで、その具体例としましては豊富学習支援での課題づくりというものが挙げられます。豊富学習支援では、夏休みや冬休みの宿題を行ってもらうことが中心なのですが、宿題が終わっている子への対応といたしまして、学生が用意しました課題を取り組んでもらうといったことになっています。

豊富の先生方との連携ということで、ことしの夏の話なのですが、小学校と中学校の先生方と懇談会を行いまして、そこでどのようなスタイルで行ったら良いかや子供たちを集中させるためにはどうしたら良いかなどのアドバイスをいただきました。そうすることによって実際の支援がスムーズに進めることができました。

次に、当日の進め方です。

こちらは例としまして、教たま数学教室での時間配分や流れの確認が挙げられます。当日のスケジュールやどこの範囲を行うかといったことは、ランチミーティングや数学教室直後での反省で実際に確認しています。

そこで、どのような質問や疑問があるのか想定することと、あと、指導の際の腹案の準備。一つのことを教えることに対してずっと同じ説明をするのではなく、別の方向からアプローチをかけて理解してもらうために腹案を練ります。

これらの想定や準備は、生徒、学生もそうなのですけれども、メリハリをつけ、子供の理解度の向上につながっているということがわかりました。

次に、二つ目の、情報の共有です。

こちら、教たま数学教室での学生と先生が共有している情報を例にお話ししていきたいと思います。

まず、(1)から(3)までが実際に共有している情報の内容になります。

まず一つ目は、何をして、どこまで進んだか。こちらの情報を共有することで一体何につながるかというと、指導者が毎回かわっても対応可能なようにということで、教たま数学教室では誰がどの子に教えるというものが決まっていませんので、その教室に来ている生徒全員に対応できるように、この(1)番を共有しています。

二つ目は、子供の理解度と反応の共有です。

こちらは、子供の学習進度、どのくらい理解しているか、そこから有効な指導内容を考えるということと、子供の反応です。教えたときに、わかったとかわからなかったといった反応から有効な指導方法を考えるということのために(2)番を共有していると。

三つ目は、指導方法の反省と今後の課題の共有です。

こちらは、有効な指導方法を学生相互に学び合う、あるいは確認し合うといったことのために共有しています。

今お話ししてきました入念な準備と2番目の情報の共有が、この3番目の一人一人に合わせた対応に

つながっているということで、(1)番、子供に合わせた指導内容と方法ということで、その子によって進度や内容というものは違い、内容も教える方法も変わってきます。なので、教え方を工夫する。具体例としまして、途中計算等を細かく教えるのか、ヒントのみを与えて問題に取り組んでもらうのかといったことが挙げられます。

二つ目の矢印で、理解度の違いに合わせる。こちらも具体例としまして、進度に合った内容、早くできた子を教える側へ回ってもらおうといった対応も行っています。教える側へ回ってもらおうということは、実際に自分が教える立場になるので、教えるためにはまず自分が完全に理解した上で教えるということが必要なので、より定着しやすくなります。

また、学生や先生が何度も同じ説明をしても理解してくれなかったのに同じ学年の子が1回説明しただけでわかってもらえるという場合も実際にありますので、こういった対応も行う必要があるということが学びとしてあります。

(2)番です。子供に合わせた接し方、対応ということで、集中力やモチベーションを高める工夫をするということで、具体例としましては、明確な目標の提示、問題ができた褒めてあげるといったことの対応をすることが重要であるということがわかりました。

(3)番といたしまして、子供の特徴等の共有ということで、こちらは例として、各活動での反省や先生方のアドバイスを通して、それが多くの視点となり、子供の特徴を捉えることができます。そして、そこから指導内容や方法を検討することにつながっていきます。

改めまして、この三つのこと、入念な準備と情報の共有、それが三つ目の一人一人に合わせた対応につながっているということを学びましたが、このことが実際の教育現場で必要なことなのかということを実職の教員の先輩たちにお聞きしましたので、そちらも報告していきます。

先輩たちの声ということで、最初は入念な準備です。こちらでは、子供たちを飽きさせない、授業に引きつける工夫が必要であるということがわかりました。

二つ目、情報の共有では、学習支援の改善の際に重要な役割を果たしていることがわかりました。失敗を共有して、次により方向に導いたり、同じ指導だと生徒が動きやすい、また、先生が授業を進めやすいといった声もありました。

教材づくりに関しましても、ひとりで考えるのには限界があると。そのため、ほかの先生、場合によってはほかの教科の先生の授業を見に行ったり、相談することによって、よりよい教材をつくることができるということを教えていただきました。

先輩たちの声から、入念な準備や情報の共有をすることで、現場では一人一人に対応できる教育活動につながっているということがわかりました。

最後に、まとめです。

これまでの活動で、児童生徒一人一人に対応するために準備や情報の共有が必要なことを学びました。

また、先輩たちの声からも、教師になった際に、上の三つです。対応するために準備や情報の共有が必要だということの力が改めて必要なのだなというふうにわかりました。

今後は、さまざまな活動を通して、より深く学ぶ必要があるということが課題として挙げられます。

先ほども出てきましたが、先輩たちの声の中でも、子供たちを飽きさせない、引きつける工夫が、現場では必要であるので、これからの支援を通しまして実際に勉強していきたいなというふうに思いました。

最後は、それだけではなく、ふだんの大学の授業等、数学そのものもそうですし、教育法を含めた授業での学びを生かしていくということが今後の課題として挙げられるのかなというふうに思いました。

以上で発表を終わります。

ありがとうございました。(拍手)

○米津准教授 最後に、事業の成果と今後の展望について私からお話をいたします。

まず、事業の成果ですけれども、子供を前にした体験的・組織的な学びということを最初に項目を挙

げました。実は、私、ことしで5年目なのですけれども、来るまで学校現場を体験すればいいというような学習方法とか、そういった学びについて大変懐疑的でした。そこまでその教育的意味を認識していませんでした。つまり、自分が体験したことが全てだと、これでもう自分はわかったのだと理解したつもりになったり、体験していないものはわからないと、だから考えを放棄するというようなことも、そういった例も見てきたので、体験ってそんなに大事かなと思っていたのですけれども、ここで行ってきた学習支援活動を通して、学生が、人間的な成長という少し曖昧ですけれども、そういった成長をしていっているのを強く感じました。それは、ただ体験をしているということだけではなくて、どういった工夫をすれば目の前にいる子供の学習の助けになるのかとか、目の前の子供をどうやったら励ませるのか、そういったような、それぞれの場面で主体的に考えて活動に参加していった。それを子供から勉強したり、仲間同士、学生同士から学び合ったりした、そういったことがあったからこそ学びにつながっていったのだろうというふうに思います。

政策的にも体験活動が重視されております。その理由を見てみると、教師としての適性を試すとか、あるいは教科の内容とか指導方法を改善するとか、これはもちろん大事なことで、この中でも行われてきたことなのですけれども、それ以上に主体的なかわりで、子供から、あるいは学生同士で学び合う、こういったことが、今後、教師になっていったときにも、それ以外でも重要な学びになったのかなというふうに思います。

そうした活動がある程度の一定の責任を持ちながら、それで、そのことに一定の緊張感も保ちながら行うことができたというのは、地域とのつながりを継続できてきたこと、地域の教育関係者の方々や参加してくれた子供たちの協力あってのことだったというふうに思います。

こうしたつながりができたこと、あるいは継続できていることが、この事業の最大の成果の一つだろうというふうに思っております。

こうしたつながりを通して、地域の方々や子供たちから期待をしてもらう。そうした期待に励まされながら自分たちへの活動に対して自信を持つ。さらに、活動できていることに感謝の意識を持つ。そういったことができてきたかなというふうに思います。

それから、地域に出ることで地域を知る。そのことで、何か現実に見えることに対して少しでも対応していくといったことが教師にとって極めて必要な力量であるということで、地域から学ぶ、地域に育ててもらおうというような関係性を少しでもつくり上げていくことができたかなと思います。

事業区分としては地域貢献というふうな言い方になるのですけれども、実際には、参加してくれた子供とか、あるいは協力していただいた地域の教育関係者の方々から激励してもらうというような関係性がまずあると思います。同時に、その期待に応えて、激励に応えて学生が地域で頑張る、子供たちに対して有効な学習支援活動を考えるということをしながらか、同時に学生も地域を激励している、そういう相互の関係性ができたのではないかと、こういった関係性をつなげていくことができたのではないかと、この事業の成果というふうに言えるのかなと思っています。

今後は、やはりこうした関係性をいかに継続していくかということが大事です。関係性ということで、行事そのものを継続するというを目的にしているのではないということです。大事なところは、地域とつながって、地域から学んでいくという取り組みを続けていくことだろうというふうに思います。そのためには、同じ行事をただただ繰り返すのではなくて、毎回の活動に対して自覚的に目的、目標を持って発展的に取り組みを行っていくという必要があるだろうというふうに思います。

そうするために必要なことは、やはり地域課題を捉えるということだと思います。例えば子供の貧困ですとか、少子高齢化ですとか、この地域で言えば僻地教育なんかもどんどん問題になってくると思いますけれども、こうした課題を捉える。それらについて、どれぐらい有効なことができるかわかりませんが、知りながら、それに対して寄り添って、少しでも解決に導くような支援活動を行っていく必要があるだろうと思います。

教たま数学教室、午前の地域活動報告会でも御報告させていただきましたが、その活動は、こうした、

今回で言えば子供の貧困についての対応ということも一部の取り組みの一つの重要な目的として据えております。こういった取り組みを可能な範囲で広げたり、深めていったりといったことが大事かなというふうに思います。

こういった取り組みを経て、地域への教育活動とか学習支援活動をしながら、学生にすてきな先生になってもらおうと。それで、地域に出ていってもらって、そのことも含めて地域の教育力を向上させていく、そんなような取り組みとして継続できていければいいかなというふうに思っております。

以上で地域教育支援室の報告を終わります。

御清聴どうもありがとうございました。（拍手）

○司会 ありがとうございます。

第3報告

○司会 それでは、引き続き、地域観光支援室のほうの報告をお願いします。

地域観光支援室からで、発表者が、情報メディア学部教授のゴータム・ビスヌ・プラサド教授と、情報メディア学部4年のユバラズ・ゴータム君と情報メディア学部4年のアスタ・センチュリーさん、情報メディア学部4年の伊藤良平君、最後に、情報メディア学部3年のブン・スミット君で、発表タイトルが「STPFとの連携におけるインバウンド強化に向けた情報発信の取り組みと今後について」ということです。

それでは、よろしくをお願いします。

○ゴータム教授 ありがとうございます。よろしくをお願いします。

先ほど紹介いただいたゴータムと申します。よろしくをお願いします。

テーマは、未来STPFとなっているのですけれども、これは午前中に出ましたが、Smart Tourism Process Framework という、COCと絡んでいる別な研究プロジェクトなのですが、COCと絡んで、これと連携したインバウンド強化に向けた情報発信の取り組みと今後について報告いたします。

報告内容としては、まず同種の計画を少し紹介しますと、これまで26年から30年度に実施した事業内容についても少し説明します。特に後ろ側、僕が観光支援室の室長になったのは29年度と30年度なのですけれども、その2年度に、ほとんど前年度の3年度で得たものを重点的に説明したいと思います。

それから、少しデモがありますので、最後にまとめて説明したいと思います。

まず、背景なのですけれども、我々の内部でCOC事業を取り組んだ背景には、日本の国家計画がありまして、特に観光立国推進基本法というのが設定されて、その中で観光立国推進基本計画が決議されるわけなのですけれども、その経過は、今はもう2030年の新しいビジョンが出ているのですが、このCOCの事業の間には2020年までの目標がありまして、それは4,000万人のインバウンド観光客を目標とするというはっきりした数字が出ておりました。

そこで、このCOC事業の観光まちづくり、特に観光推進室としては、一つの大事なミッションがあります。そのミッションというのは、観光まちづくりにおいて学生の自主的な活動を促し、地域課題解決型の主導的な学びの機会を広げるというのが大学としての一つのミッションでありましたので、ここでは教員よりも学生の自主的な活動を促すという意味で、大学がいろいろなことを実現できる機会を入れるというのがミッションでしたが、ここに至るためには、あるプラットフォームをつくって、そのプラットフォームをベースにして情報を発信するということを考えたわけです。プラットフォームというのは、観光ガイドアプリ、今まではなかったもので、こういったガイドアプリを開発して、それをベースにして情報を発信するということになるわけです。

まず、そのために、26年度から30年度の事業の概要なのですけれども、上の3年間は現地調査したり視察訪問など、いろいろな企業だったりホテル業者に実際に訪問して、聞き取り調査などにフォーカスをしたわけです。また、稚内観光協会との連動、あるいは大学の中のカリキュラムに新しい観光を

新設するなどのいろいろな工夫がされまして、それらの活動レポートは、COCのホームページの中でいろいろな活動レポートが出ております。

また、最後のほうの29年度から30年度に関しては、ここで得たいろいろな聞き取り調査を生かして、それを観光ガイドアプリに反映して、その反映された観光ガイドアプリをベースに、特に留学生を通じ英語の情報を発信するというのがメインフォーカスとなっております。

よって、29年度と30年度の事業計画の主なポイントは、この二つです。これは調書にもこの番号をつけて出ているのですけれども、まず一つは、講義間、例えば観光メディアとかほかの科目とソフト制作演習などのICTの科目を連携させて、それでアプリを開発すると。それをベースにして発信するというのと、あるいは、最近ではよくフェイスブックとかツイッターなどのSNSを通じて情報を発信すると、この二つがメインになっておりまして、今、観光推進室では、このミッションを実現するため、この4人の学生に一生懸命、取り組んでもらっております。

それぞれの内容を少し説明いたしますと、まず、4の講義間の連携なのですが、これは特に観光メディア論の授業との連携をしまして、この授業を受講している学生をベースにして、市内のいろいろなホテルに訪問して聞き取り調査を行いました。特に代表的にはこの二つのホテルに聞き取り調査に行ったわけなのですけれども、ここで聞き取り調査の結論として出てきたのは、ICTの最新技術を取り入れたアプリが必要ではないかという点と、もう一つは、宗谷や稚内の地域文化を反映した観光アプリが重要であると。この特色を生かした観光アプリが重要ではないかという二つの点がありました。この中でも中国の方とかシンガポールとか、いろいろな国から外国人の観光客がふえていますので、外国人観光客に必要とする英語の情報が少ないというのが一つのコンセンサスでありました。

そういった市民の意見も生かして、全部ではないのですけれども、観光業の意見を生かしたつもりで、特に、このSTPFプロジェクトにVR機能を連携するという点と、トリッププランナーというのは、観光客が知らない地域に行ったときに、自分でどういうふうに自分の旅行を計画するという、そういう機能をつけて、もう一つは、稚内みたいに気候が非常に変動するところで、もっと安定的な、安心して見られるような、天気予報を見ることができる機能、この三つの機能が重要ではないかというふうに考えております。

これに対してそれぞれの学生が担当してまいりましたので、それを後ほどの学習の発表で聞いていただけたと思うのですが、また、文化を反映するためには、午前中に発表した、宗谷地域の古代農具とかヒマラヤの農具とかの、文化を反映するという意味で、こちらはまだこれからなのですが、こういったところに反映していくという試みをしております。

この辺はデモのほうを少し紹介しながらやりたいと思うのですけれども、例えば、既にSmart Tourism Process Frameworkという、英語でできたサイト、ウェブポータルが今公開しております。今はSTPFゼロにしているのですけれども、これ、本格的な公開ではこのゼロをなくして、stpf.wakhok.ac.jpで、日本については出てきます。これにはいろいろな機能、上のほうにとりまして、ここでは利尻とか宗谷地域のいろいろな観光スポットが出るようにしているものです。

ここで、まずはアスタ・センチュリーから、このシステムのブログについて、本人がどういうことをやってきたかというところを発表していただきます。

○アスタ氏 こんにちは。情報メディア学部4年生のセンチュリー・アスタです。

私は、STPFの中でブログの担当をしました。その理由は、稚内の観光情報について英語で書いたブログが少なかったからです。自分も、実は日本に来る前に、稚内についてあまり知らなかったから、ブログで書いている宗谷地域の観光情報を世界中に発信できるし、観光客がふえる可能性があると思ったからです。

また、こういった情報は、私たちみたいに稚内に留学する留学生にも役に立つと思います。

私は、このブログを担当して、いろいろなことを学びました。ブログをつくるために、稚内の観光地の歴史などを調べたり、実際に観光地に行き自分が観光客になり、そこでの経験をブログに書くこと

で、とても便利になりました。

次は、ユバラズさんからお話しします。

○ユバラズ氏 皆さん、こんにちは。私は、4年生のユバラズ・ゴータムです。

STPFの中で、私はトリッププランナーの担当をしました。

トリッププランナーは、STPFの下位区分であります。観光客の要望に気づいて、滞在やルートなどを推薦する機能を持たせる予定です。それは、ソフトウェア制作演習という授業で実装し、私の担当は、特にデータベースの設計でした。

トリッププランナーの概要について少し説明したいと思います。

まず、観光客、STPFの中にあるトリッププランナーを利用すると、観光客が入力することによって毎日の計画をすることができます。そのために、今はグーグルマップを利用しているのですが、これからはオープンシティーマップというオープンソースが使えると考えています。これは今後の課題となっています。

このトリッププランナーはなぜスタートしたかという、私は最初、日本に来るとき、札幌で道に迷いまして、1日おくれた経験があります。同じく稚内に来る外国人が、どこでおりればいいのかというのがわからない可能性もありますので、トリッププランナーがあればいいなと思ったからです。トリッププランナーを利用して、稚内の観光客に少しでも役に立てればなと考えています。トリッププランナーを利用することで、稚内の観光客を少しでもふやすことができればなと考えています。

ありがとうございます。

○ブン氏 こんにちは。情報メディア学部の3年生のスマット・ブンです。

私は、STPFの中でビューアーツアーの担当をしていました。ビューアーツアーは、先生と一緒にやりました。

まずはビューアーツアーの紹介です。

STPFのビューアーツアーは、宗谷地域のさまざまな場所を仮想的にシミュレーションできるようにする技術の一部です。それは、一つのビデオ、また静止画像で構成されています。今回は、ウェブビューアテクノロジーをもとに開発を行いました。

宗谷地域を体験できるよう、ビューアヘッドセットをつくってみることにします。

次は、今までのまとめです。

宗谷地域に関するビューアアプリはほとんどなかったもので、STPFアプリで実施したビューアによって、さまざまな観光サポートのビューア体験が可能となりました。季節ごとにビューア体験ができれば、宗谷地域を訪問する人がもっとふえると考えます。

ありがとうございます。

次は、伊藤さんからウェザーレポートについて話をします。

○伊藤氏 4年生の伊藤良平です。

私は、STPFプロジェクトで提供されるアプリケーションの中の機能のウェザーレポートについて担当しました。なぜウェザーレポートなのかといいますと、まず、宗谷における地域の課題とは何かと考えたら、宗谷地域は特に天気が変わりやすいということと、既存の天気予報は最短で1時間ごとの更新ということでしたので、この二つが合わせて、天気が変わりやすい1時間ごとの更新でしたら、ちょっと物足りないということで、私はリアルタイムで天気予報を、または現在の天気を提供したいと考え、ウェザーレポートについて研究をしました。

現在は、気象庁からの文字だけのデータを取得しています。そして、この文字だけのデータを取得して、整理して、こういうふうにはっと一目で見てわかるグラフであらわすようにしました。

今後の予定としては、マイクロコンピューターを利用してウェザーステーションの作成を考えています。そして、ウェザーステーションを作成した後、リアルタイムで天気のデータを表示したいと考えています。そして、私たちが提供するデータと先ほどのスクレイピングによって出たデータを比較して、

皆さんに今後の旅行のルートについて判断してもらおうと考えています。

そして、現在は、ウェザーステーションをまだ開発したいので、今後の課題となっております。

まとめとしましては、1年生や2年生のころとはまた違った目線で地域の課題について考えるきっかけとなりました。そして、スカイにサービスを提供するためにはどのようなものがあるかというのを考えることができました。

PBL形式では、わからない人にわからないことを教えることができると同時に、私が教えると、私自身、本当に理解しているのかということを考えるきっかけとなりました。

私の発表を終わります。

○ゴータム教授 今、学生がいろいろ自分で担当した内容を説明しましたが、これをページのほうで少しもう1回、ざっと説明いたします。

まず、先ほどあったバーチャル通話なのですが、例えばこういうふうに大学の通話ができたり、あるいは稚内のバーチャル通話をいろいろな、100年記念塔だったり、白い道とか、ふれあい公園とか、ふれあい公園の裏の山とか、大沼のバードウォッチングとか、宗谷岬の最北端のところとか、いろいろな、こういうふうにとんできできるようになっています。

例えば、ここにビデオも、VRの画像もあるので、どこかの画像を後ほど見せたいと思うのですが、例えばこれが礼文です。また、学内の施設とかを、留学生ですと、ネパールで非常に大学はどんなところなのかとか、いろいろ困っているらしいので、こういう施設もちゃんと見られるようにしてあります。大学の前から見るビュー、中身とか、施設、いろいろ、例えばここを、VRビューアーのイメージ画像を押しますと、ヘッドセットで見ると三次元空間を全部楽しめます、こうやって。ここにマークが出ているのは、VRビューアーが可能になっているというアピールなのですが、このようなVRセット、ヘッドセットがありまして、このヘッドセットに携帯電話を入れて、先ほどのVRを映してして、そこに自分の頭を出すと、全部、三次元の空間を楽しめることができます。

当然、ネットが少し遅いところは、ビデオはロードするのにとても時間がかかるので、少し遅いのですが、今後、こういった情報がどんどんこのページに蓄積されていきます。

また、トリップランナーというものがあつたのは、このページに行きますと、トリップランナーという、宗谷地域のトリップを自分で計画するという機能がついていますので、そこは、まだ完全にイメージどおりのものが、終了されていないですね。一応、マップ上で、どういったホテルを検索して、どういうふうにするかという機能がついています。アクセスできないときも、どこで回ればいいのかとか、例えば、よくうちの大学から留学生が、どこか行くときに、どういうふうに行くのかという、グーグルマップでも見られるのですが、この違いは、きちんと、どこをどういうふうに曲がって、何分かかかるかとか、そういう具体的な情報が見られるというところがこれの一つの進展かなと思います。ここで音声機能をつけるなど、今後はいろいろ課題が残っています。

また、物件情報とか、検索に関してもこういう最新技術の非常に優秀なアルゴリズムを利用して、そういう内部の検索の機能は、非常にすぐれた機能がついています。

また、遭難者の確認をするためのプラットフォームサービス、それは実証済みなのですが、こちらへまだ反映がされていないので、今回はこれが紹介できませんでしたが、そういった機能が今後の観光ガイドアプリにはどんどん、未来観光ガイドにはいろいろ楽しい技術を導入して、観光客が安心して訪問できるアプリができればと思います。

これが5年計画のまとめをする場なので、少し今までの成果と今後の課題を最後に説明いたします。

まず、現地調査や聞き取り調査を行って、地域のニーズを学生と教員と一緒に確認できたというところがいいところです。今までの研究では、単なるアプリケーションをつくって、研究室の中で、みんなそこで満足してしまつて終わりというのがあつたのですが、COCのこういった事業があつたことがきっかけに、学生がまちに出て、いろいろ聞き取り調査を行って、市民のニーズは何なのかというのを少し自分の体で感じるというところが一つの成果というふうと考えております。

また、今までと違って定期的な成果としては、グループでアプリケーションを開発する。今までだと一人一人が好きなのをやって終わりというのがありましたが、そういう意味において、Project Based Learning、課題を意識して、市民が、あるいはまちが求めていることを意識して、それをベースにした学習型、PBL型学習、これの実現も可能になったということがもう一つの成果として考えています。

最終的には、今回のCOCの事業によって、観光ガイドアプリを本格的に、最新技術を入れて、それを開発するだけではなく、それをベースとして情報を発信する。例えば、今、フェイスブックのページが既にできておまして、STPFというフェイスブックグループがあります。そのフェイスブックグループページをつくって、そこで留学生がいろいろな情報を発信しています。宗谷地域の文化とか、地域の特性とか、そういったことを発信して、今後、稚内あるいは宗谷地域を訪問する留学生にも役に立つ情報をそこから宣伝したりしていますし、この地域における経済的な魅力、文化的な魅力、いろいろな魅力をそこで発信しています。それも、我々ももう一つの情報発信としての成果だというふうに考えております。

少しフェイスブックページの紹介があるのですが、これは、フェイスブックアカウントを持っている方がSTPFと検索すると、そこでグループページが検索され、ここです。STPF for Community Based Tourism Support Center and DMO というページが出ます。ここにフレンドリクエストをしますと、ほぼ誰でもなれるのですが、今、特に留学生がこのページを利用して、稚内のいろいろな景色、文学をどんどんここでアップしています。当初は非常に少なかったのですが、今は54人のメンバーにふえています。全部稚内にいる人だけではなくて、ネパールにいる何人かもメンバー申請したり、稚内の情報を向こうで見たりして、いろいろなコメントだったりいろいろな会話をしたりしているようです。これも稚内の知名度、あるいは国際社会にもちょっと紹介しているプラットフォームにもなっているのではないかと思います。

今後の課題なのですが、先ほど説明したように、中期的な成果とかICTのアプリケーションは一つの製品として、そろそろそれをプラットフォームとして展開することも可能になってきていますし、将来、そのプラットフォームを通じていろいろな情報発信をどんどんできるかと思うのですが、冒頭にあった観光まちづくりの貢献に関しては、まだまだこれから、そのプラットフォームを生かして、どういうふうに取り組んでいくかという課題がまだ残っております。よって、今後の課題としては、稚内市民への声かけをもっと真剣にやらなければいけないというふうに思っていますし、それから情報発信をして、インバウンド観光にある程度寄与できればというふうに考えております。

以上で発表を終わります。(拍手)

○司会 発表ありがとうございました。

第4報告

○司会 それでは、報告の最後となりますが、まちなか振興支援室の成果報告をお願いします。

最終発表のまちなか振興支援室ですが、発表者が情報メディア学部准教授の田村龍一で、発表タイトルが「まちなか振興支援室の活動が中心市街地にもたらしたもの」ということです。

以上、お願いします。

○田村准教授 まちなか振興支援室の田村龍一と申します。よろしく願いいたします。

本日は、午前中に学生によるまちラボというところで、これはまちなか振興支援室が管理しているわけですが、ここで学生がいろいろなことを取り組んでいることを御説明申し上げましたが、本日は全体の総括シンポジウムということですので、この約3年半、準備期間1年を経て3年半たった現在、今どのような形でまちなか振興支援室の取り組みというのは考えることができるのかというところを説明させていただきたいと思っております。

本日の紹介というのは、まず活動内容を紹介させていただきまして、総括的なことを申し上げたいと思っております。特に、設立当時に、まちラボは5年後、COCの事業が終了した後に、かくあるべしという

項目が五つありますので、その項目に一つ一つ、その項目の立場から今までの取り組みというのを見ていきたいなというふうなのがメインのところでは。最後に、考察としまして、まちラボを中心としたまちなか振興支援室、これが中心市街地、中央商店街、あそこの中で活動させていただくことによって、御利用いただいた方はどのような経験をされ、プラス私たちも中央商店街の中の活動を通していろいろなことがもたらされたということを考えていきたい、二つ結論はありますけれども、それを申し上げたいと思います。

それでは、早速、まずはまちなか振興支援室の活動内容というところを御説明していきたいと思えます。

大きく分けて五つございます。

本学が位置しております稚内市の中心市街地、これを「まちなか」と呼ぶようにしております。それ以外の、例えば市外であるとか郊外、ここを「まちそと」、こんなような地理的な、概念的な区分けを思い浮かべていただいて、この中心市街地で行うようなことが基本的にまちなか振興支援室のメイン、究極の目標になるわけです。

ただ、まちなかで行っていることだけで完結するのではなくて、適宜、まちの外側からいろいろな情報とか問題意識とかを取り込んでいって、そういう観点からまちなかの状態を見てみようとか、そういうような捉え方があります。なので、まずは学生と地域の住民の皆さんの協働で動くような活動を支援するような存在であるべしというのが一つ。

あと、このまちなかで今何が起きているかということや大学なりの手法で情報提供するというのも一つ。

あとは、市民にITのサポートをさせていただくというのが三つ目。

今度はまちの外に対して、市で起きたことを広く情報発信するというのが四つ目。

そういうようなプロセスは、常にまちなか、まちの外側から、いろいろな情報や考え方、視点などを幅広く取り入れるというところなんです。

そんなような、こういう流れで活動をしていこうと。その際のコアとなるツールが、この「まちラボ」と呼ばれている中央商店街のところに位置している私たちのサテライトキャンパスであります。

こちらのほうを簡単に御説明いたしますと、まちなかメディアラボということで、学生、教員の活動の拠点とするようなサテライトキャンパスであるということです。そして、中央アーケード街の空き店舗を活用して平成27年2月にプレオープンして、27年4月18日にグランドオープンということを行いました。

ことしの4月19日に、3周年ということで、このような形で、満3歳を迎えて、これからCOC最終年度に向かって頑張っていこうというような状態です。

中を見渡すと、市民の皆様、学生、教員、どなたでも自由に、旅行者も外国人も使うことができます。そのための準備もなされております。外国人が英語だったら対応できるメディア表現指導員が常駐しております。この辺にも英語で日本の観光情報とかというのがたまっていて、非常に快適な空間であります。プラス無料で使えるWi-FiとiMacを使ったIT機器を多数そろえていて、Windowsのタブレットもありますので、この中で随分と活動することもできるのではないかと、非常に快適な空間であるのではないかと思います。

オープンが2015年4月18日ということで、この当時、大きく、いろいろなイベントなどをやって、多数の市民の皆様に御活用いただきました。ことしの9月30日の時点で、約3年5カ月で、累計1万5,000人の方に御来館いただきました。ありがたく、深く感謝申し上げたいと思います。

では、まちなか振興支援室の組織体制というのを簡単に御説明したいと思います。

基本は、まちラボでの平時での対応ということになります。ですが、その際も、まちラボに来る来館者の方とか、あと、学生、教員のイベントがあったりだとか、常に市内の、例えばまちづくり稚内さんのような団体からいろいろなアイデアをいただくような形で連携というのがあります。なので、私たち

がそれを企画、立案して、まちラボ運営委員会というところにかけて、最終的に承認を得たものが実働されると。実行する際にはプレスリリースとかプロモーションとかは徹底的に行うというのが、少なくとも今年度の私たちの活動内容、この組織体制にのっとった感じだと、こんなふうになっております。

ここにはメディア表現指導員とスタッフの方が常駐してくださっていますので、こちらで皆さんも、まちラボに行ったことがある方はお目にかかったことがあるのではないかと思います。

では、まちなか振興支援室の取り組み内容、まずはざっくりと概要から説明させていただきたいと思えます。

2種類あるというふうにも考えることもできると思えます。

一つは、大学初の地域的な交流であるとか地域の課題を提起するような、そういう大学ならではの方法でそういうものを提案するような、そんな活動を支援してきたというのがまず一つございます。

もう一つは、毎日やっているまちラボを通した、人的な交流を通して市民の皆さんにいろいろお届けしつつ、プラス同時に周囲の皆さんからいろいろなリクエストや要望をいただいて、それをさらに役に立てるといような、そういう、ちょうど真ん中にあるハブのような役としてまちラボは使われているというふうにも考えることができます。これが二つ目です。

最初の大学ならではの方法ということで申し上げますと、平成29年度の稚内市の子ども貧困問題の解決に資する実態調査、公開講座等の実施というのがこの支援室でやっておりました。これは昨年まで室長を務めておられました若原先生によるプロジェクトでございます。

この調査の結果というのはまとめられて、大学を通して利用可能だと聞いております。御関心のある方はお問い合わせいただきたいと思います。

これはまちラボというよりも、そういうプロジェクトという単位で実際に動いたというふうな、そんな状況です。

あとは、こちらの、やはり樺太引揚船にまつわるトピックというのは、やっぱり市民の皆さんは非常に関心が高い。去年、こちらの学生さんが佐美先生と牧野先生の指導のもとで発表させていただいた三船遭難事件というものです。多数のお客さんがいらしたものです。ここで生き残りの方々の生々しい証言を聞くというふうなこともございました。

この辺になると、代表的な、大学初で市民の皆さんにいろいろな関心や問題を提起するというふうな方向性で行われた事業であります。

まちラボで平時行っているようなもの、これはどんなものがあるかといいますと、大体私たちの手元では六つぐらい分類しているのですけれども、一番多いのはIT系43%。この3年半で約43%がIT系のイベントでした。語学系が28%、約3割です。3年間全部で約90種類のイベント講座というのを企画いたしました。

これはITと語学のテーマで、すごく偏っている、ITと語学で7割ぐらいいっているのですが、これは、実はまちラボの知的リソースを有効活用するというのが大きな狙いでありまして、あと、プラス、春あたりにいろいろと調査をしたところ、まだやっぱり英語とか、パソコンの日常的なサポート、それが非常に周囲の皆さんの要望が高いというふうな結論を出したからです。ですので、特に今年に関しては語学に関して大きな重点を置いております。

今年は比較的イベントをたくさんやっておりますので、イベントの利用者数もかなり、前年度と比べると、まだ活動期間が半分しかないのですけれども、大分ふえております。その辺のお話も後ほど申し上げます。

ITに関しては、コアとなっているのは、本当に初めて学ぶような方々を対象とした「初めてのワード・エクセル」という講座。例えば、今までパソコンを触ったこともないのだけれども再就職しなければいけないから、エクセルとかワードぐらい使えるようになったほうがいいかなと思ってという形でふらっと入ってこられる女性の方とかもいらっしやいます。そういう方々に広く門戸を開放して、ものすごい、一番基礎のところから解説と練習をさせていただくと。これは定期的に、月4回ぐらいのペース

で行われていますので、毎回多くの市民の方々に御利用いただいております。

この講座は、スタッフの牧野洋子さんが作成されたものであります。非常に、これを見ていただければわかりますように、第何回、第何回みたいな形で非常に細かく分類されて、その内容が少しずつ高度化していくという、すごくよくできたテキストで、受講されている方々も、結構、最初のうちは簡単ですけれども、だんだん難しくなってくるという、そんなやりがいのあることに取り組んでいらっしゃるようです。

語学に関しては、午前中に申しあげましたけれども、「おもてなし English」というのをやらせていただいております。これは観光案内とか異文化対応を英語で行う。この異文化対応、異文化を配慮した、おもてなしのマインドというのを受講生の方に知っていただくために、留学生を積極的に投与させていただきました。日本人では頭で理解していてよくわからない部分とかを、留学生の方々、特にうちはネパールなので、ネパール人の方々にしゃべっていただく。この異文化的な考慮、これを考えるというのは、とてもこれからの稚内の観光にも大事なのではないかと考えております。

これも、実は田村真理子さんの豊富な国際経験というのがありまして、それをもって、このようなテキストを独力でつくっている。先ほどのスタッフの牧野さんは本学の卒業生で、ITに関する重点的な教育を受けた方です。田村真理子さんは、もともとアフリカとかインドネシアとか、そういうところでずっとNGOとかで働いていた方で、こういうのは非常に心得があるようです。なので、おのおの強みを、たまたまおのおのが持っている強みが市民のニーズと合ったところもあって、今回、非常に積極的に語学とITのサポートということをやっている次第です。

あともう一つは、国際交流的なイベント、せっかく留学生が学んでおりますので、やらせていただきましたが、ネパールカルチャーデーというものです。これもまちラボを使ってやらせていただきました。多くの市民の方々に来ていただきました。

このような形で平常時のまちラボ活動というのをやっているのですが、結構、毎日毎日の新しい来館者をゲットするために、少しずつ、草の根的な活動は日々やっております。そういうこともやっているというのもこの辺に書いてあることです。

このような活動をしてきたので、次のトピックであるところの、これまでの活動を生活評価で眺めるというところ、これがCOCの発足のときに書いてあった5年後のまちラボの姿、成果指標です。5年後に目指す姿というところ。五つあります。これから五つ、順番に申し上げていきたいと思っております。

一つ目が、学生たちがまちなかへの意識を高めて主体的に活動を展開するようになっている、そういうような状態、これがまちなか振興支援室の目指す姿の一つ目です。これはもう、本当に皆さん、多くの方が御存じだと思うのですが、実はわっかないコーヒーフェスティバルというイベント団体、今はもう完全にまちなかを越えて、いろいろなところで活躍されているらしいんですが、大もとは、どうやらこの辺がスタートだったというようなことのように思われます。2015年の中央商店街のイベントプランコンテストで優秀賞をとったと。

こういう形で、稚内といえばコーヒーと非常に関係性の深い土地である。そういうところから、このまちなかで、ではどういうビジネス展開ができるかというところを考えて生まれたものであるというふうに位置づけることができるのではないかと考えています。

2番目が、まちなかの人々が協調し、主体的に地域づくりの活動を展開するようになっている。まちなかのいろいろな人ですね。学生だけではなく、教員だけでもなく、いろいろな団体とのつながりがまちづくりにつながっている、地域づくりにつながっているというようにところで、私どもの活動でいうと、ばおばお隊さんとか、あとはまちづくり稚内さんとやらせていただいている共催イベントなんていうのがこの辺の活動になっていると思います。これは一例で、比較的こういう、同様な、これまでの3年半の中でいろいろなタイミングで行われてきたようです。

次が、学生とまちなか住民の協働活動が広く展開するようになっていることというのが挙げられます。これが私たちの3年半の活動の中でどこに対応しているか。もともと学生と地域の方々との共同作業

たいな点から考えると、まずは、昔ですけれども、2015年に行った大学市というやつですか、中央商店街様の共催で行われたイベントのようです。

さらに、昨年度の社会教育課題研究で中央商店街の1軒1軒のお店の内容の取材を通して明らかにして、それをフェイスブックで広く配信するというような取り組みが行われました。これも中央商店街の各店舗と学生がうまく頑張っている例として挙げることができるかと思います。

そして、もう一つ、平成30年9月からですけれども、学生とコンサルによる中央市街地再開発プロジェクトの勉強会@まちラボというのがあります。これはまた後ほど述べたいと思います。

4番目です。まちなか空間とまちそと空間の情報、人の循環が定着していること、こんな姿が半年後あると望ましいということなのですが、特に2018年に関しましては、開館するときは、ほぼ毎日フェイスブックをアップデートするようにしています。ですから、今、まちラボで何が起きているかというのは、開館日に関しては必ずわかるというのが一つと、あともう一つは、稚内を離れてしまった人にも、きょうの中央商店街の様子なんかを一言添えるような感じで、特にインターネット全体を意識したまちラボの情報発信活動というのは、これはコンスタントに行うように意識的に頑張っております。あわせて、特に旅行者等にまちラボを使っていただくかなということで、トリップアドバイザーであるとか、グーグルマップの中に申請して登録しております。もう既に幾つかのコメント等を書いていただいております。

このような形で、より多数の方が、要するにまちそとの方です。まちラボをやっていることを日々把握できるように努力しております。

あと、空間の情報、人の循環ということで申し上げますと、まちラボはことしの5月ぐらいからメルマガジンを発行しております。意外に、このメルマガジン、メールアドレスを御提供いただいた方に差し上げているのですけれども、月に1回お送りするのですが、そこでおもしろい講座があると、やってこられるなんていう方もいまして、そういう意味で、メルマガも結構効果的に機能しているのではないかなというふうに思っております。

5番目、最後です。まちラボが学生や市民の自発的な活動の場として日常的に利用されてきていることと。ということで、我々は、こういう目標を達成するためにというわけではない、でも、やっぱり利用の定着というのを狙うために、日常的な利用を促進するための、例えば図書利用とか、利用者カードをつくるとか、メルマガとかカレンダーをなるべく人の目につきやすいところに配置するなどして、じゃ、行こうかなという気にさせるような、そういうような取り組みを行ってまいりました。

あと、もう一つは、実際、特に転入者の方々にまちラボをよく使っていただいて、ことしの春からですけれども、彼らがまちラボユーザー会議というのを組織しまして、私もここにいるのですけれども、出てくれと言われたので出たという形なのですが、彼らがこの会議の常連の方なのですけれども、常連の方々が、これからまちラボにどんなことをやってほしいかということブレインストーミングみたいな感じでいろいろと練っているさまが後ろのホワイトボードに書いてありますが、こういう作業を行って、最終的に常連ユーザーからの要望とか提言という形で私どもに文章として渡されました。なので、私たちもこれはちゃんと整理をして、常連さんに、さらに居心地がよくなるためには、もしくはより広い使われ方をするにはどうしたらいいかなということを考える際の貴重な情報源として使わせていただいております。

以上が五つの、5年前につくられた5年後の姿です。

こう考えると、学生や教職員の方々皆さんの積極的な活動が、これらの五つの目標を大分クリアしているのではないかなどというふうに考えることもできるのではないかと思います。

以上が3年半のまちラボのさまざまな活動を振り返って、それを総括するような形で調べてみたというところでございます。

ここで、来館者のことで、突然ですけれどもお話しさせていただきたいと思います。

この手のサテライトキャンパスというのは、いろいろなことをやることのできる、自由なのですけれ

ども、来館者の一つのパターン、今回のまちラボのパターンとしまして、1回来ていただいて何か講座を受けていただくと、新しい、違うことがあることがわかるので、それに目が向いて、じゃ、次の講座に、こういうのをやってみようかなとか、こういう希望があるとか、そういう感じで触発されて、受講機会に、さらなる自分の知識の拡大であるとか、スキルの拡大であるとか、そういうところに関心が向いて、さらに広げていこうというような努力というのか関心の広がりを見せていくような来館者の方が結構いらっしゃいました。

私達はこれを把握して、今回、なるべく単発というやつではなくてシリーズ化するようにイベントを組織してみました。単発イベントですと、1回、パソコン講座で習いに来ましたと。そこでいろいろなことを教えてくれました。それで終わりになってしまうので、なかなかスキルとして身につけにくいのですよね。学習記憶は時間がたてばだんだん薄くなってしまいます。ところが、今やっている「初めてのワード・エクセル」とか「おもてなし English」のように、前進的に、少しずつ少しずつ、ステップ・バイ・ステップで動かすような形の、シリーズ化された講座ですと、毎回やったことをやりながら、ある程度オーバーラップをしながら、ローリングしながら学習課程をこなしていくことができます。こうすると、意外にスキルの定着というのが実現できる。もしかしたら来館される方がその点に注目されて、結果としてこのように利用人数が増えているのではないのかなというふうに感じました。

最後、考察のところに参加したいと思います。

というような継続的な利用を促進するような仕組みでやっていくと、結局、市民が、最初は何か一つの特定的な問題意識を抱えてやってくると。例えば中国語を勉強したいであるとか英会話をやりたい。そうすると、そこからさらにいろいろなところに関心が飛び火するような形で広がって行って、中には勉強等だけで使う人も出てくるような、そんな流れというのが我々観察することができました。

こういう市民との接点を求めて、もう一つまちラボでよく来ていたのが市外転入、市外から転入した人たちの、先ほどのまちラボユーザー会のような方々です。ああいう人たちが中で人脈をつくりたい、市民とのコネクションをつくりたいということでまちラボを使っていたというのもあります。あとは旅行者、これはあまり来ることがありませんでしたけれども、あとはこういう単発イベント系ですね。なので、最終的に、こういう人的交流、まちラボで人的交流みたいなのが行われることでさらに知見を広げて、友達もふえて、そういう意味で、市民みずからのスキルや学びを拡張する情報源としてまちラボは役に立ったのかもしれないというのがまずきょうの総括の結論の一つであります。

もう一つ、まちラボは中央商店街で活動しておりますので、当然ながら中央市街地の方々いろいろな人々とのネットワークに組み込まれております。ですから、我々が何かもたらしたとか、そういう偉そうなことを言うわけではなくて、むしろもたらされたものも当然あります。そのもたらされたものに関する結論でございます。

今、まちづくり稚内さんがいろいろな、ブレインストーミングみたいな形で、中央3丁目再開発会議というような会議を実施していて、私も月1でオブザーバーとして定期的に参加しております。そうすると、私自身もそこで知り合いという関係がつけられて、興味深いことに、その会議にコンサルタントで参加されている方が、ある日突然私のほうに来まして、お話をいただきまして、中央商店街の再生に関心のある学生はいないのかというような問い合わせをされてきて、いるのかなと思ったのですが、実はうちの大学、数人、私が声をかけた限りで喜んで参加したのが数人ほどいます。彼らをコンサルの方と合わせて、合わせる日は月1回ですけれども、みんなの授業がないときに、まちラボで勉強会を行っております。これも、実際に使命を持ってやっているというのではなくて、若い学生が、こういうふうな稚内だったらいいよねという、そういう夢があるのだったらそういう夢を語ってもらって、それに対してどうやって実現することができるのかねということを、このコンサルの方、たまには私から、そういう宿題みたいなものを与えさせて、1カ月ぐらい考えておいてみたいな感じで進んでおります。

まさに、まちなか振興支援室は中央商店街のさらなる再興に寄与するような活動をしていきたいというようなことを一つの柱として掲げておりましたが、この期に及んで、最後の3年5カ月たって、そう

いう人材が大学にいて、実際にそういう計画をいろいろと考えている人のもとで、しかもコンサルから無料で月1回教えられる、そういうチャンスが与えられていると。学生にとってはとてもよい学びの機会であると思いますし、それが実際の再生計画に反映されるか、されないかは、また別の話です。彼らはそうやっていろいろな地域づくり、まちづくりに関して、コンサル的な手法を勉強するよい機会、これはなかなか大学では得られない機会だと思っております。なので、そういうことのお役に立てたという貢献もあるのではないかというふうに考えられました。

以上で、簡単にまとめさせていただきたいと思います。

まちなか振興支援室の活動の内容を説明したということで、特に五つの目標からどんなふうになったのかというのを考えてみます。

来館者の行動観察からイベントの企画方法に関する考察を行う。

まちなか振興支援室が中央市街地にもたらしたものに対して、以上の二つがあるのではないかというように指摘を行いました。

以上でございます。

このまちラボの3年半の活動というのは、これらの方々の御協力がなければあり得なかったものだと思います。御協力に感謝申し上げます。

以上で発表を終わらせていただきます。

ありがとうございました。（拍手）

○司会 ありがとうございました。

済みません、時間がちょっと押しております、再開を16時としたいと思います。

これより10分間の休憩を挟んだ後、公開座談会を実施いたします。

また、この間にアンケート用紙のほうを回収いたしますので、御協力よろしく願いいたします。

それでは、16時再開といたします。

（休 憩）

公開座談会

○司会 それでは、時間となりましたので、これより公開座談会を始めたいと思います。

まず初めに、登壇者の御紹介をいたします。

左から、稚内市教育委員会教育部部長、渡邊祐子様。（拍手）

続いて、稚内市まちづくり政策部部長、川野忠司様。（拍手）

最後に、本学学長の斉藤です。（拍手）

これ以降の進行に関しましては、斉藤が担当いたします。

○斉藤学長 限られた時間、10分延ばしますから40分までになりますけれども、この時間で総括的な話を、市の関連部署の方に来ていただいて、外からといいますか、そういう立場から見てどう評価されるのかといったことも伺いしながら、会場から寄せられた質問などにも答えるというふうにしたいと思います。

きょうは飾られたりしていませんけれども、うちが採択されたCOC事業のテーマは「地域の教育力向上とまちづくりで協働する地（知）の拠点整備」で、大きくは地域の教育力向上とまちづくりの二つになっています。ですので、まずはその二つに分けて、お手元の新聞報道資料というとした資料があります。それをぱらぱらと、ごくざっと見ていきながら、ああ、こんなことがあったねというのを会場の皆さんとも共有しながら、その上で、まず地域の教育力向上についてコメントを伺って、その後、まちづくりに関してまたコメントを伺って、さらにその後、皆さんからいただいた質問をもとにして意見交換していくというふうに進めたいと思います。

どうぞよろしく願いいたします。

新聞資料の1から9までが地域の教育力向上にかかわるものであります。きょう、午前中も午後も、いろいろ詳しく紹介がありましたグングン塾ですとか、それから教たまの無料塾、それから豊富町での学習支援、それから猿払村との授業遠隔支援というのが4ページまであります。

5ページは、きょうは中で紹介がなかったのですが、後ろにあります数学のマスフェア、うちの渋谷教授がやっているものを学生が各地に出前授業のようにして持って行って、子供の前で披露して、数学への興味をかき立てるといった活動もそこに紹介されています。

それから、稚内の社会教育との関連で6ページ、7ページは載せたのですが、学生が「私たちは、【カラフト】を知らない」という作品で賞を受けたということも一つの多分きっかけになって、稚内市がつくった樺太記念館、オープンしたのについて、そこで上映される映像資料については、うちの学生に作成依頼が来て、それが今現在公開されているという流れになっているということを7ページで紹介しています。

それからもう一つ、社会教育施設という関連でいいますと、8ページに、水族館に関して、もともとインバウンドの人が来ているのに日本語表示しかない。もったいないということで、多言語化を進めるということで、上のやつは2015年の段階で英語、ロシア語、それから下の記事は、去年の段階で中国語も加えて、スマホでQRコードでも説明が見られるようにしたといった、うちの学生の取り組みが報道されています。

最後、9ページが、ICT教育ということも一つの目標にしていたので、その関連の記事を紹介しておりました。

学校教育に関しては要望がありましたが、社会教育については、今紹介したように新聞記事も含めながら、どれか、何か気になる点について、渡邊部長からコメントをいただきたいと思います。

どうぞよろしくお願いいたします。

○渡邊氏 それでは、よろしくお願いいたします。

まず、ICTを活用した事業のことです。

最後の9ページに関連する新聞記事が載っていますけれども、稚内市ではことし、全ての小中学校に大型テレビと実物投影機を全ての教室に配置しました。今、隣に、稚内市の予算を牛耳っているというか、予算の統括を行うまちづくり政策部長がおりますけれども、予算を要求するときには必ず、どんな効果があるのだ、何でこれをやらなければいけないのだ、これがないと授業ができないのかみたいなことをすごく責め立てられるというか質問されて、それに答えなければいけないのですが、今回、COCの事業の中で、事前にICTを活用した研修を現場の先生たちとやっていただいて、その中で先生たちの意見や希望も多く聞いていただきました。そういった裏づけもあったので、そういったことをしっかりとプレゼンして、事業導入にこぎ着けたというか、快くいいよと予算をつけていただいたという経過があります。

それと、いろいろ飛んで申しわけないのですが、樺太記念館のビデオをつくっていただきました。私は仕事で10回くらい見ているのですが、毎回本当に涙が出るという内容なのですね。そういった、樺太からの引き揚げ、稚内市とは切っても切れない、そういった歴史について、本当に若い学生さんたちが真摯に向き合って、素晴らしい作品をつくってくれて、全国でもそれが評価されて、いろいろ表彰されているということがとてもうれしいです。まだ見たことのない方がいらっしゃったら、ぜひ樺太記念館においでになって、それを見ていただきたいなというふうに思っています。

それと、先ほどの報告の中でも教員を目指す学生さんたちのグングン塾なども報告されていましたが、本当に、子供たちにとって身近な存在である大学生が教えてくれる。それは、子供たちにとっても新鮮な喜びであり、やる気につながっているし、また、先生を目指す学生たちにとっても、先ほども地域貢献という話がありましたけれども、そういった活動の中で、ぜひこのまちに残って、宗谷の教育、稚内の教育を盛り上げていこうと、そういう気持ちになってもらえたら本当にうれしいなというふうに思っています。

水族館ですけれども、稚内市でも今、インバウンド観光というものをいろいろやっていますけれども、なかなか私たちでは、インバウンドといっても、じゃ、外国人の方たちにどんなことをしたらいいのかなというのがわからない部分がたくさんありました。その中で水族館のことを気にかけていただいて、こういうQRコードで魚を紹介するというのをやっていたいただきました。

実際に、台湾や中国、香港などからツアー客も多く水族館に入っておりますので、本当にそれは地域に根差した活動をしていただいたなということで、本当に感謝しております。

以上です。

○斉藤学長 ありがとうございます。

最初に申し上げたとおり、次に、10ページ以降のものを題材にしながら川野部長に後でお話しいただきたいと思います。

10ページが地域情報の映像発信ということで、学生が市民の第九演奏という活動を記録にして発表したものが表彰されたというものですけれども、右側、11ページが豊富なまちおこしの様子をやはり記録にしたということで、どちらも賞をとったという話ですけれども、賞をとったことはうれしいのですが、そのことよりも、学生たちがその地域課題に取り組んで、非常に地道に、長い期間をかけて取材、撮影を行って、そこの地域の方々との信頼関係を築いたといったことが非常に大きな経験だったのではないかというふうに思っています。

11ページの豊富温泉街の作品がきっかけになって、川島旅館さんが、総務省でしたか、どこかにお金をもらって映像作品をつくるというときに、プロではなくてその大学に頼めばいいじゃないかということで学生に依頼が来て、ドラマ制作を行ったというふうにつながっています。

さらに、やはりうちの学生の取り組みが、地域医療に関しての映像作品もつくってもらって、これを実際に役立てたいということでつくられたのが13ページの新聞になっていますけれども、これも実際に地域医療を考えるいろいろな集まりで利用されているというふうに聞いています。

14ページ以降がまちラボの話になります。詳しくは先ほどあったばかりですのでざっといいますが、14ページは、地道に行われている講座で、ETロボコンに関する一つの活躍の場にもまちラボがあって、16ページは留学生と市民の交流の場にもなり、それから、稚内珪藻土という地域の特産物です。地域資源を活用する場として学び、活用するといった場にまちラボがなったり、それから、18ページは先ほどやった商店主セミナーも行ったりしたと。

もう一つは、19ページで、中心市街地の活性化ということで映像作品をつくったというのが19ページ。

それから、当初、まちラボを中心にして行ったコーヒーフェスティバル、これはもう3回目を数えました。

21ページ、最後ですけれども、サンタラン、これも2回を迎えました。

いずれも学生が中心になって企画、広報、運営、会計、全部やったということで、これも大変だったけれども、非常に大きな学びになったのではないかというふうに思っています。

これらも、COCそのものに入っていないものが結構あるのですけれども、派生的にといいですか、スピワードといいですか、発展的に行われた地域との関連でした。

ということで、以上の話題に関して幾つか川野部長からコメントをいただきたいと思います。

お願いします。

○川野氏 市役所のまちづくり政策部の川野といいます。どうぞよろしくをお願いします。

先ほど教育部長が私のことを言っていたのですが、あくまで仕事がそうさせるだけで、実はそうではありませんので御理解をお願いしたいというふうに思います。

それで、まず、いろいろと映像の部分が今、学長のほうからもお話があったのですが、実は行政がやはり一番苦手とするものといいますか、そういったものというのは、文書だとかそういったもので物をまとめるとか、そういったものというのはできるのですが、こういった映像関係をつくって、そ

それを例えばどこかの施設で活用するとか、そういった部分は非常に苦手で、大体が今まではコンサルですとかそういう事業者のほうに委託を出していたのですけれども、物すごい費用がかかります。やはり人件費が相当かかりますので、そういった中で、今、大学の学生さんがいろいろと自分たちでアイデアを出して、いろいろな映像をつくっていただいているということは非常に私たちとしても助かっていますし、物すごいいいものだなというふうに思っています。



特に、うちの部でいいますと、地域医療の担当はうちの部なのですけれども、実は、今、稚内市は医者が少ないですとか、そういった形の中で、市立病院のお医者さんの確保、診療科の確保ですとか、あと、プライマリーケアの1次医療を守るということで、開業医の誘致制度という中で、診療所を誘致しようということをやっているのですけれども、なかなか、診療所の多くは大体、今は5件かな、来ているのですけれども、そういった中で、お医者さんが大変で、大変な中でそういったお医者さんに苦情を言ったりしたら疲弊してしまって、もうやっぱり稚内にいたくないと。やはり医者も人間ですから、自分たちを応援してくれる地域というのが一番うれしいことですし、そういった思いの中で、何とか地域で、そういった地域医療を守ろうということで市民会議が立ち上がりました。

その中で、いろいろとシンポジウムですとか、出前講座とあって、地域に出向いて行って、そういった医療の関係の出前講座をやっているのですが、そういった部分で、今、北星大学の学生さんがつくっていただいたドキュメンタリーの「地域医療は、地域が守る。」というこの映像については、非常に市民の皆さんにとっても評判がいいのと、あとは市立病院の先生方も、非常によくできた映像だねという中で高い評価を受けています。

そういった部分では、私たちもこれから、今までつくったそういったものはうまく活用していきたいというふうに思いますし、これからもまた大学のほうに、お願いできるものについてはお願いして、こういった部分で活用していきたいというふうに思っています。

それから、後半のほうで、稚内市だけではなくて、豊富町ですとか、猿払村ですとか、あと、利尻町ですか、そういった部分の大学との連携という部分があります。実は宗谷も、全部で10の市町村があるのですけれども、定住自立圏という広域連携をしております、稚内市が中心となって、いろいろな分野でいろいろ連携しましょうということで、この大学のことも連携事業の一つという形になっております。今はまだ三つの町村という形なのでしょうけれども、それぞれ、私たちもほかの町村にも協力を求めていきますが、ぜひ管内全部のそういった町村との、大学とのそういった連携協定みたいなものを結んで進めていただければなというふうに思います。それによって、またそれぞれの地域に行って、例えば学生さんですとか先生がいろいろなお話をして、それに興味を持って、管内の高校生とか、そういった方がこの大学に来ていただけるという部分も期待できるのではないかなというふうに思います。

全体を通してなのですけれども、今、北星大学の先生には、市のさまざまな計画ですとか審議会ですとか委員会の運営委員になっていただいています。また、学生さんも、非常にこういったことに興味を持っていただいて、今、ちょうど稚内市で来年から始まる第5期の総合計画を策定しているところで、あした審議会の答申があるのですが、その審議会にも学生さんが一般公募で募集をしていただいて、いろいろな意見をいただいています。

この後、31日に審議会の全員協議会があって、議員の皆さんの意見を聞いて、来月の1日から市民向けのパブリックコメントをやって、今度の12月の議会に新しい総合計画として上程する予定なのですけれども、そういった形の中で多く参加をしていただいていますので、まちづくりというのはやっぱり、よくいう若者、よそ者、ばか者というような、そういったあれがあるのですが、やはり学生さんの

意見というのは斬新なアイデアに富むものが多いものですから、これからもぜひそういったものに参加をいただいて、自分の考えといたしますか、そういった部分を発信していただければなというふうに思います。

以上です。

○齊藤学長 ありがとうございます。

では、一応、一通りお二人からお話を聞きましたので、会場の方からの意見なども参考に、ちょっと紹介させていただいた上で、また改めて意見交換をさせていただきたいと思います。

20枚ぐらい書いていただきまして、今ちょっと整理するのが大変で、分量が分量ですので全て紹介するわけにいかないのですけれども、とりあえず感想めいたものをざっと紹介させていただきたいと思います。

学習支援活動については、地域における人づくりに直接かかわる事業であり、大学、大学生がより身近に感じ、稚内、宗谷の将来にかかわることにつながっています。学生の皆さんが体験を通して学ぶことはもちろんですが、子供たちも学習意欲の向上や、先生でない大人の皆さんから自分の目標を膨らませることができると思います。それで頑張ってくださいという感想でした。

それから、地域に貢献する学生たちを誇らしく思います。卒業後も、このまちのまちづくりで活躍してほしいですし、COC事業が終了しても引き続き研究を進めて、大学の知名度をもっと高めてほしいと思っています。これも励ましでした。

責任者に加えて実践にかかわった学生や職員も参加した報告が、具体的な取り組みの様子を理解するため役立ち、とてもよかったです。

ついお褒めのやっぱかりであれなのですけれども、済みません。ちょっととりあえず読みます。

全てとてもすばらしい内容と発表でした。特に第2報告の「地域の教育力向上と学生の学び」は、教員を目指す学生がどのような取り組みを行い、地域にどう貢献しているかがわかりました。杉浦君の発表も落ち着いていて、とてもすばしかったですと書いてある。名指しされています。

それから、最後に一言書いてあって、留学生が非常に頑張っていますね。感心しましたという批評もいただきました。

あと、何人かの方が多分書いておられるのですけれども、今後どうなるかという話について、一つこういったことを書いていただきました。

COC事業は今年度で終わってしまいますが、今回御紹介いただいた活動を終えるというのは非常にもったいないと思います。特にグングン塾や数学教室は、地方が考える問題の一つを解決する一助になっていると思いますので、今後は稚内市と協力し、続けていくことができればよいのではないかと思います。

これは御要望という形で、特にまちラボのことで、これは、先ほどもちょっと発表の中に含まれていたのですけれども、一応事業補助、補助金は終わってしまいます。うちのCOC事業の中で一番お金がかかっているのが実はまちラボでありまして、それに関しては、今の形でそのまま続けるというのは難しいけれども、今ここで明らかにしてもらったような役に立つ機能、あるいは地域に望まれている機能については別の形で発展的に何か生かしていく場を新たに求めたいというふうに考えています。ですから、あそこで行われているさまざまな講座とか、数学教室ですとかといったものは、特に後者については若林さんとも相談させていただいて、何らかの形で続けていければなというふうに、個人的にも思いますし、多分そういう議論も進めているところですので、渡邊さん、よろしく願います。

それから、まちラボのそれ以外の機能については、そのまま残すのは難しいものもあるかもしれませんが、本校のほうに持ってきたり、中央商店街のそばの何かの施設を間借りして何か続けるといったことも検討していきたいと思っています。その意味では、稚内市という自治体以外にも、どこか協力してくださるようなパートナーが見つかるばいいなというふうに考えているところです。

それから、ちょっとこれは変わった質問と言うと悪いのですけれども、特に我々のような学校に関し

てですが、胆振地震のような非常時の情報集約拠点のような役割は担われているのでしょうか。特にまちラボというのがあって、実は充電、稚内市も市役所でやっていましたけれども、まちラボもやりました。稚内市は1人30分という制限があったのですけれども、混んだので。まちラボは時間無制限で、満タンになるまでできたということで、だから、うちのまちラボのページを見ている人は多分気がついて、あのときに充電に来ることができたのですが、そうでない方にはなかなかお知らせする機会がなかったかなと思います。

それ以外に、うちのゴータムが停電の後に提示したのは、ここをやっぱり一つのエネルギーや情報の拠点にして、いざというときにはここがバックアップ、あるいはいろいろなエネルギーや情報の提供拠点になるといったことも構想すべきではないかという提案がされています。まだ具体的にどうなるかわかりませんが、やっぱりそのような役割というのは必要だということが明らかになっていると思いますので、大学として可能な限り具体化していければなというふうに考えています。具体的にはゴータムさん、よろしくお願いします。

あと、事業を通じた活動について、学生さんの自己評価はどうですかというのがあって、これは、きょう発表した学生なんかの言葉の端々からある程度わかっていただけのではないかなと思いますけれども、非常に、特に地域志向科目とか、その他のさまざまなCOCの実践の中で、学生に対してとったアンケート結果によると、それによって地域に対する関心が高まったという声が多分、やらないのと比べれば、それは高いですし、それから、具体的な自由記述の声でも、地域に役立つことをしたいとか、地域のイベントにより積極的に参加したいとかといった声があったのは事実です。僕の実感としては、新入生として入ってくる段階で、既に地域のお役に立ちたいということを述べる学生が前よりふえているなど。だから、つまり大学の性格がそれだけ明らかになって伝わっていて、それを魅力の一つとして感じてくれている方がいるのかなというふうに、僕は個人的に感じているところです。

ここまでで何かコメントを挟みたいこととかがもしあれば、

お願いします。

○渡邊氏 地域の学力向上ということで、グングン塾ですとか数学教室、この後も継続してほしいというような御意見がありましたけれども、稚内市は、幼稚園、保育所から小・中・高、大学まで、学校間連携が非常に進んでいるまちで、稚内では地域のこういうつながりは本当に普通のことのように行われていますけれども、実はほかのまちでは、なかなかそういうのは難しくてできないのだというお話もよく聞いています。やっぱり大学の存在感というものはとても高いものがあると思いますし、学生さんたちがそういった地域の教育に携わってくれるというのは、本当にこのまちにとって大変重要なことだと思っています。COC事業のある、なしにかかわらず、そういったところでいろいろ協力していけたらなというふうに思っています。

○渡邊氏 まちラボの関係だったのですけれども、私も中央地区にああいった施設があるのは非常に大事だというふうに思います。いろいろな地域に活動拠点センターという施設があるのですが、中央地区には実はないのですね。そういった中で、社会教育的な部分ですとか生涯学習的なことをやっていますので、何とかそういった部分をこれから大学のほうと、私たちもいろいろとメニューを探しながら協議はしていきたいなというふうに思います。

あと、学生が地元に残るというアンケートがあったのですけれども、実は今、総合計画をつくっていると行ったのですが、その中の大学の部分で、やはり、この大学の卒業生が地元に残る割合を多くしようというKPI成果表を今設定していますので、これから具体的な部分は、当然地元の企業の方の御協力もありますし、大学さんのその資料の関係の方ともいろいろと協議をしながらやっていきたいと思えます。

それと、防災については、今、学長がおっしゃったように、そのとおりだというふうに思います。今回の地震で、長いところでは2日間停電したというのは、私が中学校1年生の1週間停電になった以来だと思うのですけれども、非常にやはり情報の伝達というのが大変で、稚内市は防災ラジオを配って、

防災ラジオで情報伝達をしているのですが、やはり若い人を中心に、この2日間で相当防災ラジオの貸し出しが多くなっています。それとやはりSNSの活用という部分で、市内でラジオを聞けるといいのですが、聞けない方もいらっしゃると思いますので、やはりそういったSNSをどういうふうに活用するかという部分については、また大学様が高度なノウハウを持っていますので、その辺はまた協力しながら、この活用について、防災という意味合いで検討していければなど、そのように考えています。

以上です。

○斉藤学長 ありがとうございました。

予定では質問票に答えるという、たくさん書いてくれた方々がいらっしゃって、拾いにくいので、もし今この場で、これについてはぜひ聞きたいという方がいらっしゃったら挙手願ってお伺いしたいと思います。どなたかいらっしゃいます？ここに書いてあるけれどもまだ読まれていないとか、これについてはぜひ感想を強く言いたいとかということがありましたら、どなたかいらっしゃいましたら。

特になければまとめに入っちゃいますけれども、大丈夫ですか。

では、私、最後にまた一言述べさせていただいて、もしまたあれば、お二人からお願いしたいと思います。

冒頭の挨拶でも申し上げましたけれども、COCに参加することによって、もともとあった建学の精神である地域に貢献する人材の育成といったことについて、より具体的に、日常的に、要するに卒業生を送り出せばいいでしょうというだけではなくて、実際のカリキュラムの中でとか課外活動の中で学生が日常的に地域とかかわる機会を設けるという意味では、より自覚的に行うことができました。そのことによって大学と地域の関係が深まって、そこで学生が活躍する場を得ることによって、学生はそこで成長するという、この循環がうまくできたのが、このCOCの5年間だと思っています。

文科省の誘導によってうまくいってしまうというのはちょっと悔しい気はするのですが、事実、そうやっていい形ができたということですから、これは、補助金がなくなるにしても、できることは全部これからもやっていくということで多分学内に異論はないと思いますので、このまま続けていきたいと思っています。

やっぱり学生が育つという意味でいうと、さっきの映像制作の話もちょっとお話ししましたけれども、あと、教たまとか、いろいろな、実際に触れ合う中で信頼関係ができていって、そのことがまた新しいニーズを生んで、学生が頼りにされるといったことは、これはやっぱり大事にしていきたい地域との関係だと思っています。学生も実際に、何回か前の地域活動公開で、「地域に育ててもらいました」ということを素直に語った学生がいたのですね。非常にうれしかったわけです。ですから、そういった地域とのかかわり方、大学にいるのだけれども、やっぱり育つのは地域だというような関係をこれからもこの地域と位置づけていければいいなというふうに私自身思っていますので、ここにいる関係者の方々、これからもよろしくお願ひしたいというふうに思っています。

最後に感想を2人から。よろしいですか。

○渡邊氏 このCOC事業を経験した学生さんたちが卒業して、今、稚内市役所ですとか、あるいは稚内の教員になって、またそこで地域に貢献してくれたり、地域からいろんなことを吸収している、そういう姿も見られます。本当に、採用の面接のときの話になってしまいますけれども、貧困プロジェクトのときの地域の発表のときのバックのスクリーンをつくりました、あのビデオをつくったときに、そういう活動をしましたとかと言ってくれる学生さんたちもいて、何か本当に学生のうちからこういうふうな地域のことを考えてくれているのだなということを本当に思います。ぜひこの大学と学生さんたち、稚内市の財産だと思っていますので、これからも本当に活躍を期待しています。

以上です。

○川野氏 最後になりますけれども、やはりこの稚内北星学園大学というのは非常に地域に近い学校だというふうに思います。私もいろいろな事業等でこの大学とのつながりもありますし、実は6年前から稚内市も会議の進行役を養成するファシリティー研修というのをやっています、その研修では本当

にこの大学の学生さんが多く参加していただいて、そこで誕生したファシリテーターがこの大学でその研修をやっているというようなこともありますので、今もいろいろな場面で、卒業生がファシリテーターをやっていたりとか、そういった部分があるので、本当に地域に近い大学だというふうに思いますし、その強みをこれからも生かしていただければなというふうに思います。

また、COCの各事業については、やはり事業というのはどうしても、補助金事業ですとか交付金事業というのが終わってからはなかなか厳しいという部分なのですが、まだいろいろな、国だとか道だけではなくて、今は民間でもいろいろな、そういった制度がありますので、私たちもそういった部分もちょっと勉強させてもらって、情報を提供したいというふうに思いますので、いずれにしても、連携しながら、これからまた進めていきたいなというふうに思っていますので、これからもよろしくお願ひしたいと思います。

○齊藤学長 ありがとうございます。

この機会が、皆さんにうちの大学のことをより詳しく知っていただくという機会になったと同時に、我々自身も、こうやって来ていただいて、いろいろな意見をいただいて、励まされた場になりました。どうもありがとうございます。

以上をもって公開座談会を終わらせていただきます。

ありがとうございます。(拍手)

○司会 ありがとうございます。

座談会の参加者の方々はお席にお戻りください。(拍手)

閉会挨拶

○司会 それでは、最後に本学副学長の佐賀より御挨拶申し上げます。

○佐賀氏 COC事業推進責任者の佐賀でございます。

本日は、お忙しい中、COC事業総括シンポジウムに御参加いただき、ありがとうございました。

また、午前中の地域活動報告会から御参加いただいた皆様、長時間にわたり御参加いただきましたことを重ねて感謝申し上げます。

公開講座に御登壇いただきました稚内市まちづくり政策部長、川野様、稚内市教育委員会教育部長、渡邊様、本当にありがとうございました。貴重な御意見や励ましをいただきましたことを生かして、これからも活動を進めてまいりたいと思います。

本事業は、地域の課題を通して学生が主体的にそれらの解決策を考え、実行することで学生の成長を促していこうというものであります。そういう意味で、課題解決についてまだまだやるべき分野があるということは事実ですし、認識もしておりますけれども、本日の午前中、あるいは今回の発表を聞いて、学生の成長にかかわる活動を行えてきたのではないかなというふうには自負しているところであります。

事業終了後も、まさに地の拠点として恥ずかしくないように、これまで培ったノウハウであるとか、そういった活動を引き続き、学生の能力が発揮できるような場として生かしていきたいと思っております。

これら活動は、まさにまちを教室にして行ってきたものであります。稚内市はもとより連携自治体や地域の方々の御協力がなくてはできなかったことばかりだと考えておりますので、今後も学生が成長するために御助言、御指導、御支援をいただければ幸いですというふうに思います。

これら御支援をお願いして、閉会の挨拶とさせていただきます。

今後ともどうかよろしくお願ひいたします。(拍手)

○司会 ありがとうございます。

以上をもちまして、COC総括シンポジウムは終了いたします。

本日は、お忙しい中、御出席ありがとうございました。(拍手)

5. アンケート集計結果

<調査の概要>

実施年月日: 平成 30 年 10 月 27 日

出席者数: 80 名

調査回収数 24 枚(出席者数に対する回収数の割合 30%)

第 10 回地域活動報告会においては、毎回実施しているアンケート調査を実施した。
また、COC 総括シンポジウムにおいては、公開座談会での利用を想定したコメントの記入を求めた。

<凡例>

- 1) 当該設問に対する回答数を「n=」で表記した。
- 2) 自由記述については、回答者の意図を損なわぬよう、原則として原文の形で取りまとめた。

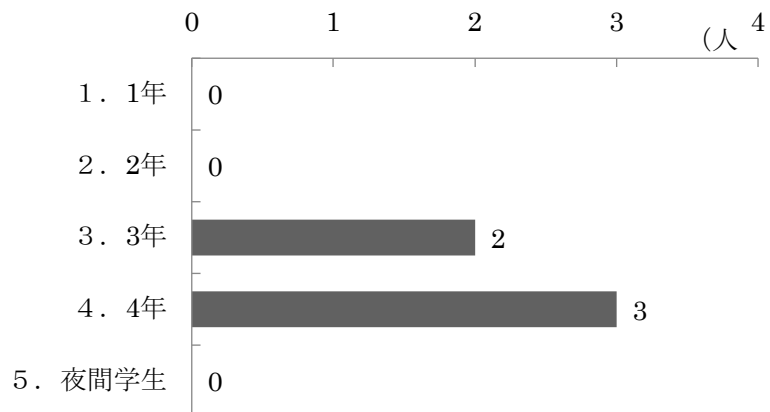
<結果の概略>

当日参加された 80 名の方のうち 24 名の方より回答を得た。

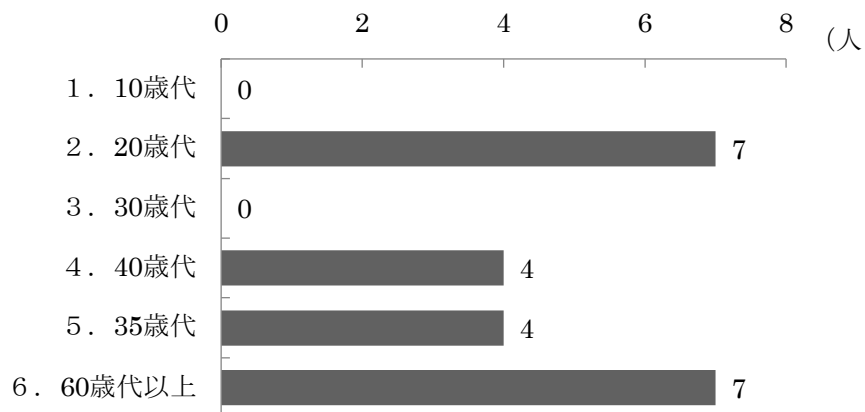
「報告会に来てよかったと思いますか。」という質問に対しては、たいへん良かったが 12 件 (50%) でした。その理由については、「大学で何を目的に何の活動をしているのかを知る事ができたため」や「多くの市民に聞かせることが出来たらと感じました。今後も地域教育振興の核となる稚内北星学園大学に期待しています。」というような回答をいただきました。

(1)はじめにあなたの学年(学生のみ回答)、世代、所属をお聞きます。(各1つに〇)

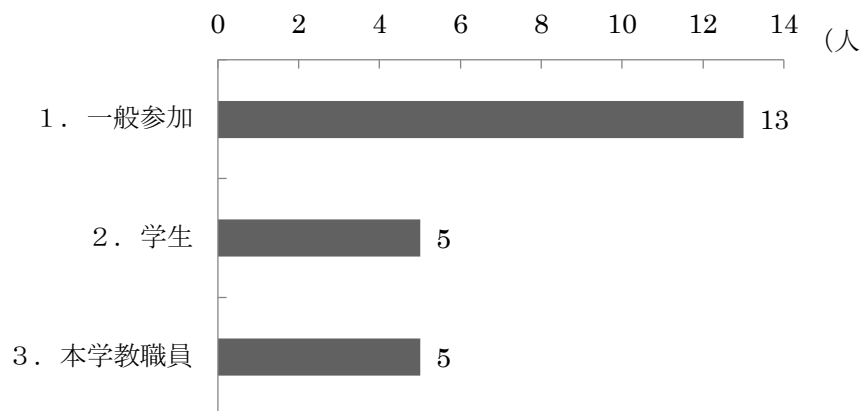
① 学年(学生のみ回答)n=5



② 世代 n=22

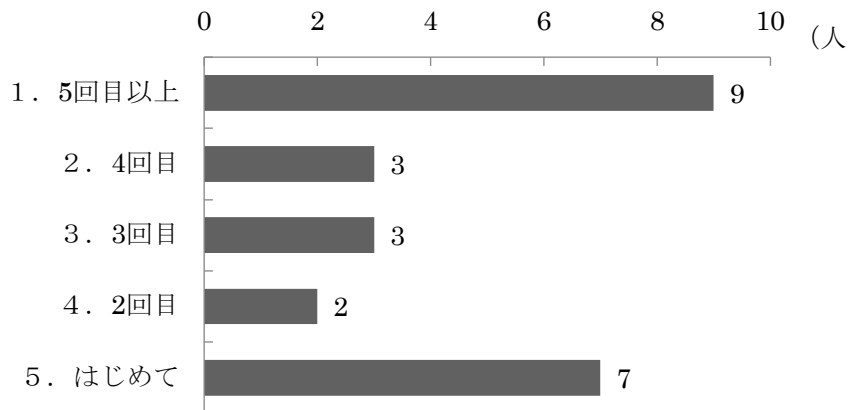


③ 所属 n=23



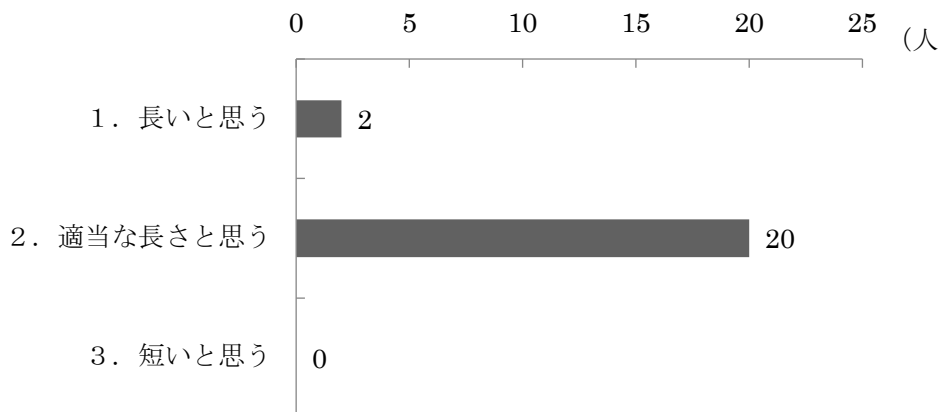
(2)これまで、本学では地域活動報告会5回、シンポジウム2回を開催しました。何回目のご出席かお聞きします。(1つに〇)

n=24

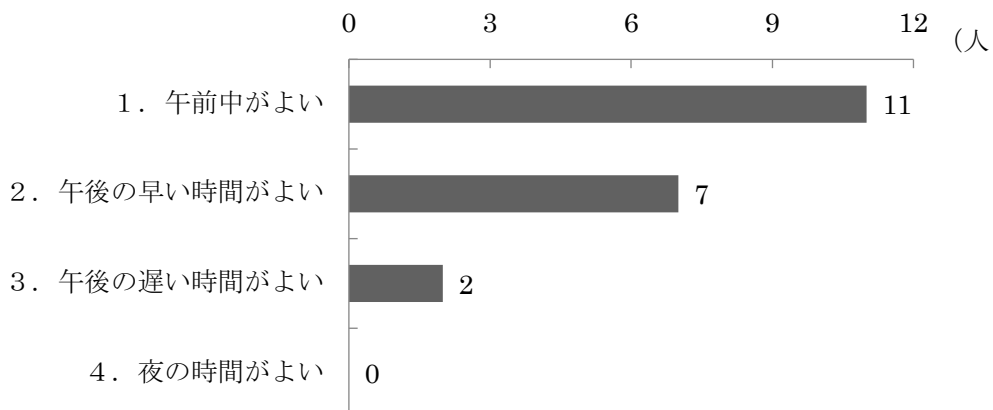


(3)地域活動報告会の長さ、開催時間についてお聞きします。(各1つに〇)

① 地域活動報告会の長さ n=22

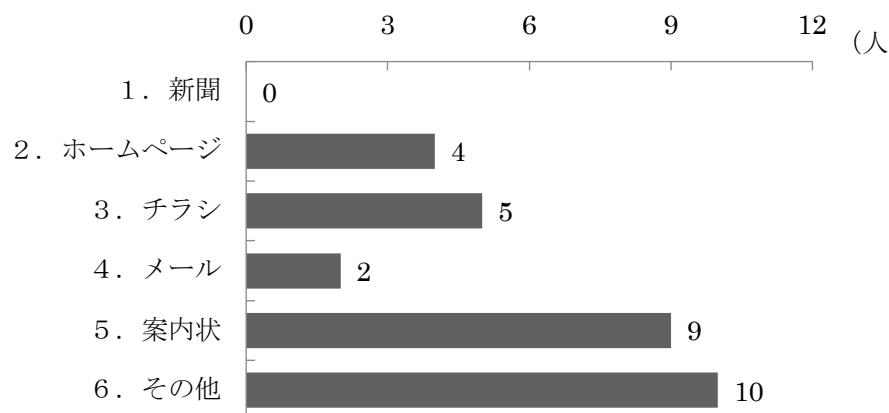


② 地域活動報告会の開催時間 n=20



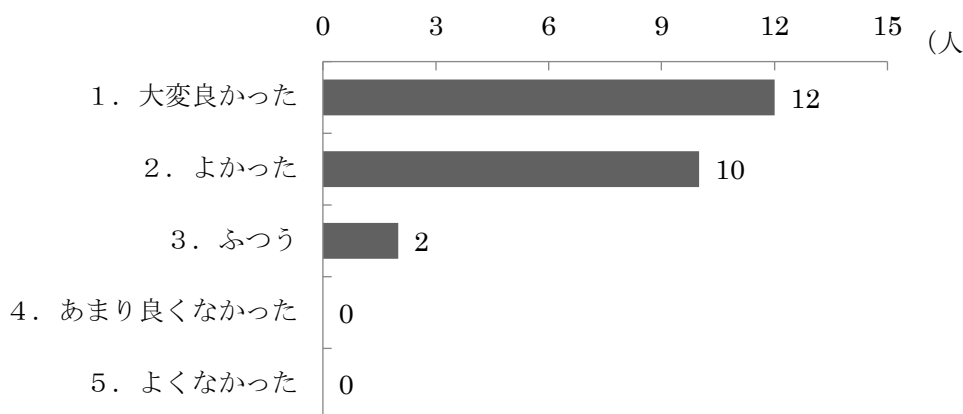
(4)今日の地域活動報告会を何で知りましたか。(複数回答可)

n=30



(5)地域活動報告会に来てよかったですか(1つに〇)

n=24



「1.大変良かった」を選択した理由(自由記述)

地域のニーズを取り入れ密着した活動が出来ていて良かったと思います。また、留学生も積極的に参加しており大学としての取り組みが成功していると思う。(大学職員)

学生が中心となって生徒さんに「無料塾」を実施したり、「まちラボ」では学生と市民の学びの交流等行っており、頑張りが目に見えます。(一般参加)

多くの市民に聞かせることが出来たらと感じました。今後も地域教育振興の核となる稚内北星学園大学に期待しています。(無回答)

「2.よかった」を選択した理由(自由記述)

大学生の活動内容が良く理解したため(一般参加)

多彩な活動をコンパクトに拝聴できた(本学教職員)

活動の経過がわかる(一般参加)

他の学生が何をしているのか知ることができた。(学生)

より具体的な話をきけてよかったです(本学教職員)

(6)今後、このような地域活動報告会や講演会、シンポジウムで取り扱ってほしい内容や話題(学生、本学教職員は行いたい内容や話題)をお聞かせください。

全学生の発表(ゼミでしていること等)(学生)

他の地域でやっている活動などの紹介(学生)

(7)さいごに、各報告等についてご感想や激励のメッセージをお聞かせください。

報告①

遠隔地からトラブルに対処する方法はありますか?(本学教職員)

実演が興味深い(ただし時間がかかってしまう場合の備えが必要か)(一般参加)

石臼の機能そのものを現代的マシンにする→現地でのメンテが困難との事だが石臼が遠方からでも操作可能なシステムにするIoT化→IoT化した現地システムのメンテは困難ではないのか(一般参加)

今後の社会に必要な技術と思われるので引き続き頑張ってくださいと思います。(一般参加)

IoTとVRの組み合わせを古代農具に利用したのはおもしろい(一般参加)

とても便利な機能だと思いました。(学生)

「伝統文化をIoTが支える」とも斬新な視点だと感じました(一般参加)

新しい地域の在り方、新しい家族の在り方を感じた(属性無回答)

高さんが学生支援するようすが目に見えるようでした(一般参加)

準備がもうちょっと事前に設定できたらな(本学教職員)

報告②

雪国ならではの注意点や取り組みは特にありますか?(本学教職員)

教員に加えて、活動に参加した学生の声が聞けて良い(本学教職員)

今後の活動が具体化されるといいですね(一般参加)

学校の授業改善。一般の塾での指導改善とのちがいが、独自性がよくわからなかった(一般参加)

貧困問題等の問題、学生の教える力の向上のために実践とのことで地域にいても学生にとっても良い取り組みただ、この背景には小中学でしっかり学べない、学ばない生徒が多いから、こちらの対策が必要と思う。(一般参加)

教材、指導方法を中学校とすり合わせをするのが重要と感じました。(一般参加)

塾でアルバイトする学生と比較することで成果を出すことも考えられます。(一般参加)

稚内でもっと有名な活動になるよう頑張ってください。(学生)

学生の石尾さん、堂々とした発表に圧巻です。教たまの経験が教師としての自信につながるのだと感じたところ(一般参加)

体験を通して学生が成長しているとの話しが良かった(一般参加)

とてもしっかりした発表(内容も)ですばらしかった(本学教職員)

報告③

「まちラボ」から出張する講座はありましたか?(本学教職員)

職員・教員に加えて活動に参加した複数の学生の声が聞けて良かった(本学教職員)

市民による認知が広がっていますね(一般参加)

興味深いテーマ、内容だと思う。市民講座との連ケイも考えれば発展していくのではないか
(一般参加)

地域ニーズで学生主体に動いており今後も継続してください(一般参加)

学生の積極的な参加が実現できていて、素晴らしいと感じました。(一般参加)

参加者のニーズに応じて頑張ってください。(一般参加)

どうしても稚内の中心が大黒にずれてきているところがあるので、少しでも中央に人がにぎわうようにしていくよい活動だと思います。(学生)

学生の板谷さん、前原さんの EXCEL 講座は地域の方にとって、大学ができる一つの貢献のかたちだと思います。スベディさんの観光英語で地域観光を支えるといったテーマもとても発想豊かだと感じます。(一般参加)

日本語がみなさんとても上手でした(一般参加)

学生からの話を聞いて本当によかったです。(本学教職員)

全体

まちラボにての講座でお世話になりました。これからも市民とのアカデミックな交流を続けてほしいです。(一般参加)

街の活性化になりますので、今後も活動の継続をお願いします!(一般参加)

各報告のみでなく、学生による司会も良い(本学教職員)

発表されている方は非常に熱心で好印象でした。(一般参加)

市民との交流は大切な場として活用してください。(大学職員)

教えることは難しいです。特に学ぶ人のレベル等で全く違ったアプローチが必要であると思います。発表の中では工夫ということばが使われてましたがその工夫について具体的に聞きたかったです。ただ、成功をおさめていることならしっかり工夫されているものと思いました。(一般参加)

地域に貢献する大学の取り組みとして、とても頑張られていると感じました。(札幌大学)

有意義な活動報告会だったと思います。(学生)

地域の大学として頑張っていることがよくわかりました。マスコミ等を活用して研究していることや実践していることを広く市民にアピールしてください。(一般参加)

総括シンポジウムアンケート

第1報告 わくらボ

・昼休みに安藤先生から伺ったのですが、大学院生がいらないということで学習コンシェルジュが育てた優秀な学生をコンシェルジュあるいは TA として育てる必要があるのではないかと感じました。高シウ先生の能力が高いのも今後について良かったのかというのが疑問に残りました。

・コンシェルジュとは「なんでも屋」という意味だと聞きました。組織において、この「なんでも屋」の存在はとても重要と考えます。「地域」とか「連携」とか必ずと言ってよいくらい様々なテーマに添えられるキーワードです。しかし、現実には本当の「地域連携」はなかなか進んでいない現状があります。困った時や誰かとつながりを持ちたい時、「まず相談してみよう」というコンシェルジュの存在は大変ありがたいものです。コンシェルジュを介してコミュニケーションが広がり、仕事を進めるうえで大切なパートナーにめぐり会える機会が広がるものと感じました。稚内北

星学園大学のわくほくメディアラボは、まさに真の地域連携を進めるモデルケースになるものと思います。「地域を活性化する」「産業を強化する」いずれもその街に住む「人を育てる」事が出発点です。この取り組みを機に、国・道・市・民間の連携や教育、労働、福祉、観光などの連携を広げ、活力ある稚内の地域作りに少しでも役に立てるよう私もがんばろうと心から感じるシンポジウムでした。

・学習コンシェルジュの利用実態に学年別のデータが気になる。課題に参加者が限定されるくるとあるが本気でなんとかしたいなら学年別・男女と細かく分けて考えた方がいい。学生と1くりにしても様々だ。学年が上がるとコース＋ゼミ、学内に居場所ができる。課題にも対応する力がついてくる。限定されることは悪いことなのか。コンシェルジュの内容が多く何を一番大事にしているかが見えてこない。勉強面なら講義に問題があるのではと思う。

・わくらボにいるシュウ先生と、学生が自宅から遠隔的にskype等にリアルタイムで相談したりはできますか？(冬場など特に)

第2報告 地域教育

豊富学修支援 小中学校の教育と連携。教たま数学教室誰でも同じ内容を教えられるのはすばらしい。一人ひとりに対応しなくて良い。または少なくすることも大切だと思います。学生が工夫について主体的に考える機会になった。地域から学ぶし、貢献もする。学生ボランティア(あたりまえ)=ありがとう(地域から)

・発表の中で1 入念な準備2情報の共有3一人ひとりにあわせた対応が必要とのことで先輩教員等からも意見を聞いてより重要性を確認したものと思います。ただし、現在の学校教育で上記の対応が出来ているのでしょうか。「教たま」と学校教員の現場は違う部分(似て非なり)があるのでそういう部分も知って地域の課題解決にはげんでほしいと思います。

・前にも聞いたような気がする。新しい事をしていく必要があるのは分かるが何をしたいのか、何ができるのか。教職の活動内容は一部しか分からないが学びたいのは子供だけなのか。新しいことをするには広い考えが必要になる。子供は勉強したくないでも保護者はさせたい。じゃあ親に教えて、親が子へ場所、方法、だけでなくターゲットを変えるのもおもしろいと思った。

・同一の年度内、参加学生同士の情報共有のほかに、年度を跨いで「先輩たちから」情報データを引き継ぐことはありますか？(インタビューしにくいのでなく、「日誌」などを引き継ぐとか)

・COC 事業は今年度で終わってしまいますが、今回ご紹介いただいた活動を終えてしまうのは非常にもったいないように思います。特にグングン塾や数学教室は地方が抱える教育の問題の一つを解決する一助になっていると思いますので、今後は稚内市と協力し、続けていくことができればよいのではないかと思います。(地方と都会での教育水準の格差)

・毎年参加させていただいています。いつも”地域課題”をおさえた活動をされていること時代の流れを先取りしたり不変な課題等々、学ばせていただいています。特に学習支援活動については地域における人づくりに直接かかわる事業であり大学(生)がより身近に感じたり、稚内宗谷の将来にかかわることにつながっています。学生の皆さんが体験を通して学ぶことはもちろんですが、子どもたちも学習意欲の向上や先生ではない大人の皆さんから自分の目標をふくらますことができていると思います。可能な範囲で学習支援活動、幼保小中高大の連携を継続していただければと願っています。

第3報告 地域観光

・観光まちづくり、地域課題解決、観光ガイドアプリ。BLOG,Facebook, Twitter で情報発信。VR作成は学社に依頼するのですか。留学生が体験したことを英語で返信するのはとても良い考え。天気は時間ごとに更新→リアルタイムで更新を回答した→雨・雪対策ができておもてなしの方が良いのではないかと。地域のニーズ？→観光客のニーズ？→稚内の魅力は誰が決めるのか？

・インバウンド強化に向けた情報発信ですが、この情報はインバウンドのみにゆうこうなのか。観光は重要だが、地域の魅力があるのであれば、その先として地域への定住を意識した活動ができればより活性化すると思います。

・VRが特に印象的ですが、ARの利用はどのくらい進んでいますか？

第4報告 まちなか振興

・田村先生「ニーズ調査業務」とスライドにありましたが、どんな業務ですか？行政(稚内市)とのコーディネーター役(交渉係)はどんなスキルが必要ですか？また、大学と行政が連携することの意気は？

・まちなか(中心市街地) まちそと(市外・郊外) H29.4.18 オープン 15632 人来館
ボランティア活動の話がないのはなぜでしょうか？地域のイベントを支えることも「まちなか」まちラボの役目でもあるのではないかとその活動からCOCの活動がなくても活動が続くように頑張ってください。

1) 大学発の提案、2)人的支援から要望→補助金が終了と「まちラボ」を移すであれば失敗？

IT43% 授業 28%→両方ともお金を取れば「まちラボ」は必要ではないか。費用対効果で1時間当りの利用料金を算定して利用者アンケートするのはどうか

・まちラボの継続可能性が難しいのではないかと感じました。

・まちラボと市民のむすびつきは強いと思った。まちラボに行けばおじさんおばさんが話していたり、パソコンのことを聞きに来たりとイベント時だけでなく生活の日常にまちラボが入ってきている。

・胆振地震のような非常時の情報集約拠点のような役割は担われているのでしょうか？

全体

・「教たま」「まちラボ」「未来 STPF 観光アプリ」等稚内北星学園大学の様々な地域活動を知りましたが、その内、授業としてカリキュラム単位化しているものは、何と何ですか？自主活動でも参加意欲が高い理由とは？

・学生が地域(まち)に出るためには、時間割づくりや学内組織体制の改革がとても大事だと思いますが、5年前、COCに着手された折、どういった教育改革をなされたのですか？(とくに一学務として)＝座学とフィールドワークの両立の改革

・5年間のCOC支援事業終了後、今後も稚内北星学園大学がちいきで学生を育て、大学が地域貢献していくためにも「地域志向型教育」のスタンスは不変かと思いますが、これからの心配事、かかえている課題はどんな事でしょうか？

・事業を通じた活動について学生さんの自己評価的なものはどうですか？

・今後、特に重点的に継続していきたい活動はありますか？

- ・来年度以降、連ケイ自治体と協働する予定がある新規の取り組みなどはありますか？
- ・COC 事業がなければ実現できなかったと思われる活動があれば教えてください。
- ・移動図書館のような「移動ラボ」は可能でしょうか？「まちなか」だけでなく「まちそと」も巻き込むような
- ・COC 総括シンポジウムの4つのテーマの中で「地域の教育力向上と学生の学び」と「STPFとの連携におけるインバウンド強化に向けた情報発信の取り組みと今後について」の2つについて、感想を述べさせていただきます。学習支援については、現在本市以外で3町村で実施していますがもっとひろげてほしいと思います。大学・地域ともにWinWinの事業でありPRにもつながり学生確保対策にもなるのではと思います。観光についてはもっと熟度を上げて行政・協会等と連携して進めてほしいと思います。最後に留学生、非常に頑張っていますね感心しました。
- ・大学が様々な取り組みを行っていることを改めて認識しました。理解が難しい部分もありましたが、高等教育にふさわしい研究内容で、ぜひ、この大学で学びたいと、多くの学生に思っほしいと思います。地域に貢献する学生たちを誇らしく思います。卒業後もこのまちのまちづくりで活躍してほしいですし、COC 事業がしゅうりょうしても引き続き研究を進めて、大学の知名度をもっと高めてほしいと思っています。
- ・責任者に加えて、実践にかかわった学生や職員も参加した報告が、具体的な取り組みの様子を理解するために役立ち、とても良かった。
- ・全てとてもすばらしい内容と発表でした。特に第2報告の「地域の教育力向上と学生の学び」は、教員を目指す学生がどのようなとりくみを行い、地域にどう貢献しているかがわかりました。杉浦君(学年3年)の発表も落ち着いていてすばらしかったです。
- ・一層の地域住民との交流願います。
- ・学生さんの活躍を新聞等で拝見して頼もしく思っています。これからも先生方ともども地域に溶け込んだ活動を期待しています。

資料

アンケート調査票

アンケート

< お 願 い >

- このアンケートは、COC推進事業の推進と地域活動報告会等の充実を図る目的で、参加者の皆様の感想やご意見をお伺いするものです。このアンケート調査の結果は、集計して利用され、個人を特定することはありません。
- このアンケートにより得た情報の管理は、個人情報保護規程等に則り、COC推進委員会が適切に行います。ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

稚内北星学園大学

以下、7点お伺いします。該当する番号のマークシートを丁寧に塗りつぶし、自由記述に感想をお書きください。
※両面印刷ですので、裏面もご協力よろしくお願いします。

良い例 ● 1 年

悪い例 ○ 1 年 ⊖ 1 年 ⊕ 1 年 ⊗ 1 年

(1) はじめにあなたの学年(学生のみ回答)、世代、所属をお聞きします。(1つを塗りつぶして下さい)

1	学年 (学生のみ回答)	① 1年 ② 2年 ③ 3年 ④ 4年 ⑤ 夜間学生
2	世代	① 10歳代 ② 20歳代 ③ 30歳代 ④ 40歳代 ⑤ 50歳代 ⑥ 60歳代以上
3	所属	① 一般参加 ② 学 生 ③ 本学教職員

→ ③で“1”を選択された方にお聞きします。
具体的な所属を教えてください。(例：高校教諭)

(2) これまで、本学では地域活動報告会6回、シンポジウム2回を開催しました。何回目のご出席をお聞きします。(1つを塗りつぶして下さい)

4	① 5回目及びそれ以上 ② 4回目 ③ 3回目 ④ 2回目 ⑤ はじめて
---	--------------------------------------

(3) 地域活動報告会の長さ、開催時間についてお聞きします。(各1つを塗りつぶして下さい)

5	地域活動報告会の長さ	① 長いと思う ② 適当な長さと思う ③ 短いと思う
6	地域活動報告会の開催時間	① 午前中がよい ② 午後の早い時間がよい ③ 午後の遅い時間がよい ④ 夜の時間がよい

(4) 今日の地域活動報告会を何で知りましたか。(複数塗りつぶし可)

7	① 新聞 ② ホームページ ③ チラシ ④ メール ⑤ 案内状 ⑥ その他
---	---------------------------------------

(5) 地域活動報告会に来てよかったと思いますか。(各1つを塗りつぶして下さい)

8	① 大変良かった ② よかった ③ ぶつう ④ あまり良くなかった ⑤ 良くなかった
---	--

理由をお聞かせください： _____

(6) 今後、このような地域活動報告会や講演会、シンポジウムで取り扱ってほしい内容や話題（学生、本学教職員は行いたい内容や話題）をお聞かせください。

(7) さいごに、各報告等についてご感想や激励のメッセージをお聞かせください。

報 告 ①：

報 告 ②：

報 告 ③：

全 体：

<ご協力いただきましてありがとうございました>

Open Source Portfolio(OSP)のmatrices機能を利用した評価システムの開発および地域の学習者の学習成果物とコンピテンシーとのマッピングによる目標達成度の評価

研究構成員(代表者)浅海 弘保 / ビスヌプラサドゴータム / 佐賀 孝博 / 安藤 友晴

概要 次世代 e-Learning システムにおいて、Competency Based Education(CBE)の実現のため、学習者が学習成果の自己・他者評価を可能にするルーブリックフレームワークを導入し、学習者が学習の自己調整を可能にする仕組みを導入する。さらに、コンピテンシー、ルーブリック、学習成果、学習ポートフォリオ等の相互相関を見出し、学習成果(Learning Outcome)から抽出できるよう、コンピテンシーと学習成果、学習プロセスの記録ルーブリック中の評価項目間の多次元マッピングを行い、Project Based Learningにおける学習意欲の向上に起因する要素を探る。本ポスター発表では、システムへの導入について、その進捗状況を報告する。

はじめに

学士課程教育の維持・質の向上に向けた改革として2008年に中央教育審議会答申である「学士課程教育の構築に向けて」が出された。そこでは、「学位授与方針」(ディプロマ・ポリシー)、「教育課程編成・実施の方針」(カリキュラム・ポリシー)、「入学者受け入れの方針」(アドミッション・ポリシー)の3つの指針策定の方向性が示され、これらの指針に基づく取り組みの中で計画・実践・評価・改善(PDCA)のサイクルを確立することが重要であるとされている[1]。「ディプロマ・ポリシー」の指針による取り組みにおいてeポートフォリオを利用することで、カリキュラムと学習活動との対応を体系的かつ明確にすることができ、その学習成果は学生の学習のエビデンスとして活用することができる。eポートフォリオは学習成果および成長プロセスを測るうえで、eラーニングシステムとの親和性も高く、LMS やCMS 等のeラーニングシステムの導入率の高い大学での導入は、非常に有用である。しかし、学習成果および成長プロセスを測るための客観的指標が乏しいために、eポートフォリオシステムと呼ばれるシステムを導入しても単なる学習成果物の蓄積システムや掲示板システムと何ら変わらない運用となっている場合が多いのが現状である。

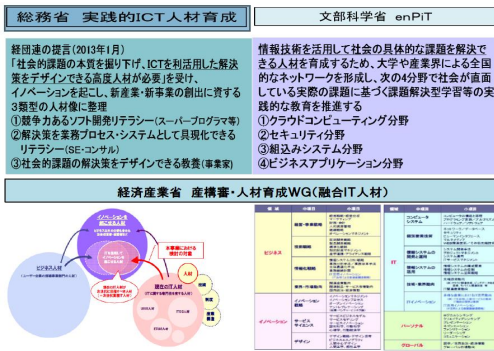
目的

社会や産業のイノベーションを起こす人材、新たなビジネス・システムをデザインを描く人材、農業、医療などの他分野とITを融合する人材など、産業界の求める人材は変化している。

大学教育も、「社会的課題を引き出し、解決のための新たな事業の創出・ビジネスをデザインする実践力」、「高度なITのスキルはもとより、そのスキルをどう活用、応用するかの実践力」といったような従来の知識継承教育からより一層実践的な教育の拡充が求められるようになってきた。

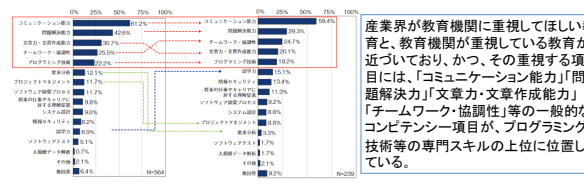
これからのIT人材は、いわゆる特定分野のITスキルを修得しているだけではなく、『課題を解決できる』『解決策をデザインできる』ことが強く求められている。実際に教育界でも、従来の知識修得型講義から、より実践的なスキルを修得できる教育形態(PBL等)に取り組んでいる事例も増えている。産業界(IT企業)が教育機関に重視してほしい教育と教育機関が近年重視している教育の比較[2]によると、経団連、総務省、文科省の人材像に変化がみられる。[図1]

本研究では、地域の産業界の求める人材像と高等教育機関で行う人材育成を適合させるための教育改革を目指し、コンピテンシーベースの教育に必要なシステムの開発と導入を目的とする。学習者が学習目標に対して到達度の自己評価によって確認する方法と、どのようなコンピテンシーが獲得できたか学習成果物から評価できるようにするシステムの開発である。



目的を達成するための方法

地域の産業界が求める人材像の概念整理を行い、大学教育の教育内容、評価基準の策定、アセスメントポリシーの策定を行い、ルーブリックに基づくコンピテンシー評価を実施する。地域産業界の期待する人材像とのすり合わせを行う。(一般的に、産業界は大学教育の成果として、卒業時に一定のコンピテンシーの修練を積んでいることを期待している。[図2])



ルーブリックによるコンピテンシー評価

大学での教育講座は多岐に亘り、講座テーマに応じて、学習目標レベル、修得スキル、実施形態、対象人数(受講学生数)は異なる。全ての講座を同じ評価項目により、受講学生のコンピテンシー・レベル到達度を評価することは非現実的である。各要素の組み合わせをパターン化し、講座の学習目標レベルに応じて、教員がコンピテンシー評価ルーブリックを柔軟に活用できることがポイントになる。コンピテンシー評価項目は「参照モデル」(表1)とし、講座に応じて育成したい学生の能力目標を選択、追加、カスタマイズなどを行い、実効性ある運用とする。

表1 コンピテンシー評価参照モデル

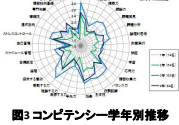
コンピテンシー	評価項目	評価方法	評価時期	評価者
コミュニケーション能力	1. 問題解決力	グループワーク	授業中	教員
	2. チームワーク	グループワーク	授業中	教員
	3. 交渉力	グループワーク	授業中	教員
	4. 交渉力	グループワーク	授業中	教員
チームワーク・協調性	1. チームワーク	グループワーク	授業中	教員
	2. チームワーク	グループワーク	授業中	教員
	3. チームワーク	グループワーク	授業中	教員
	4. チームワーク	グループワーク	授業中	教員
文章作成能力	1. 文章作成能力	レポート	授業後	教員
	2. 文章作成能力	レポート	授業後	教員
	3. 文章作成能力	レポート	授業後	教員
	4. 文章作成能力	レポート	授業後	教員

進捗状況と今後の予定

本学の学習管理システムLMS(moodle)には、コンピテンシーフレームワークがあるが、コンピテンシーは策定前のようである。実験用にmoodle付属のexample.csvでimportして内容を確認すると、企業向けのものであった。中央大学[7]、愛媛大学のコンピテンシーのルーブリックによる評価を研究し、学科会議、カリキュラム編成会議、FD推進委員会などと協力して作成していく予定である。学習成果と醸成されるコンピテンシーとの関連付けについては、科目担当者が課題を出題する際に目的や目標設定するため、外部ツールによって自動抽出すると祖語が生じるため、従って、課題の出題者に委ねるべきであろう。学生が学習記録に基づいてコンピテンシーに関して自己評価を行うためのrubric-pluginをe-portfolio(mahara)に実装した。最終的にはe-portfolioシステム上でコンピテンシー評価の学年推移を参照できるように整備していく。[図3]

参考文献

- [1] 文部科学省(2008) 学士課程教育の構築に向けて(答申), 中央教育審議会, http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_jcsfiles/afiedfile/2008/12/26/92177067_001.pdf
- [2] IPA 実践的講座構築ガイド~産学連携教育の自立的展開を進めるために~第3部 評価基準編 <https://www.ipa.go.jp/files/00055678.pdf>
- [3] 経団連、「今後の日本を支える高度IT人材の育成に向けて」, <http://www.keidanren.or.jp/policy/2011/096.html>
- [4] 総務省、「ICT活用者の成長」, http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/joho_tsusin/joho_jinzai/
- [5] enpit, 「高度IT人材を育成する産学協働の実験教育ネットワーク」, <http://www.enpit.jp/>
- [6] IPA IT人材白書2013, 「今後の日本を支える高度IT人材の育成に向けて」, <http://www.keidanren.or.jp/policy/2011/096.html>
- [7] IPA IT人材白書2013, 「今後の日本を支える高度IT人材の育成に向けて」, <http://www.keidanren.or.jp/policy/2011/096.html>
- [7] 中央大学コンピテンシー育成FD研究会, 科学的グローバル教育モデルとしてのコンピテンシー育成 <http://www.ise.chuo-u.ac.jp/ISE/outline/gmaior/competency/competency.pdf>



抜粋

地域、対象に対する拡張を生む「移動式数学博物館」の有効性に関する実践的研究
—学生の素材や事例の選択・加工・伝達におけるデザイン能力の育成を通して—

瀬谷 久 但田勝義

研究の背景

平成29年度の地域志向教育研究経費の採択研究「三層の教授—学習活動で構成する「マス・フェア」の実践的研究」



マス・フェア
(稚内市立宗谷中学校)

成果

学生の社会的自尊感情の高揚
参加者の数学に対する興味・関心の醸成
家族との数学を通してのコミュニケーションの形成

課題

本学の学生をデモンストレーターとして位置付ける設定において、大学の授業受講のためによる時間の制約から、実施回数や実施場所に制限が発生する。

「マス・フェア」の有効性を鑑み、地域、対象に対する拡張とその実施可能性を備えた設定が必要である。

研究の目的

数学にかかわる内容を展示用に加工したものを、参加者に観察・体験させる「移動式数学博物館」の有効性を実践的に検証する。

数学博物館の構築

基盤 先行研究、「マス・フェア」の実践、「数学博物館」の予備実践の結果を踏まえる。

「マス・フェア」との比較 展示件数増やし20から30, 説明の表示を充実させ、展示性を高め、数学の面白さを可視化し、間接的に示す。

学生の位置付け 数学にかかわる展示のデザイナーとしての役割を位置付ける。

研究の意義

学生に対して 数学科教員にとっての能力である教材化の素地となる、学生の素材や事例の選択・加工・伝達におけるデザイン能力の育成

地域住民に対して 広域の地域住民のノンフォーマルな学習による数学に対する興味・関心の醸成

これらが確認できれば、地域の教育力向上にかかわる学校教育、社会教育への影響が考えられる。本学による楽しい学びの場の提供は、地域のレジリエンスを高めるための存在意義を強く示すことになる。

実施内容

開催状況

- 平成30年2月～3月：稚内市立図書館
- 平成30年8月：市立名寄図書館
- 平成30年8月～9月：枝幸町立図書館



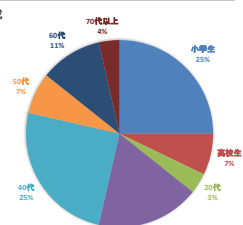
数学博物館
(稚内市立図書館)

内容

No	展示テーマ
1	白い紙が立ち上がった！
2	動かない点が必ず1つある
3	簡単な立体視を体験しよう
4	二面鏡で遊ぼう
5	立方体がいっぱい
6	円周率の話題 1, 2
7	四角い穴に立体を入れよう
8	あなたの思った数を当てます
9	1個のリングに必ず答えがある
10	指を使ってかけ算をしよう
11	あなたの生れた日は何曜日
12	2倍に拡大した図をかくてみよう
13	2つの輪をつなげて中央を切るとどうなるかな
14	図形パズルに挑戦しよう

No	展示テーマ
15	17段目に秘密がある
16	あなたの超能力を確かめてみよう
17	2%の奇跡
18	シャット・ザ・ボックス (対戦型ゲーム)
19	数字探しのデータづくりにご協力ください
20	マッチ棒クイズに挑戦しよう
21	素数を知ってるセミがいる
22	誰が勝つかわからないようにしよう
23	計算尺を知っていますか
24	ハノイの塔に挑戦しよう
25	シャボン玉が球形なのはなぜだろう
26	3点を結ぶ最短道路を作ろう
27	楕に三角形の心の位置を教えてください

観覧者構成



研究の成果

参観者の感想

- ・家でもやってみたいです。(小学生)
- ・今度もやってほしいです。(小学生)
- ・数学や算数は改めておもしろいと思いました。(高校生)
- ・数学の教員をしています、初めて見るものや驚いたものがあり、授業で話題にしてみたいと思います。(20代)
- ・児童館などに移動展示して下さると子供達、たくさん触れられると思います。(30代)
- ・小学校や中学校で上手に取り入れることで数学に対する意識がもっともっと高い子供達が増えていくと思うので改めて創意工夫の大切さがわかりました。(30代)
- ・図書館での数学の展示、とてもよかったです。(40代)
- ・息子と2人で「すごーい」と叫んでしまいました。(40代)
- ・循環節について改めて学ぶことができました。(40代)

「移動式数学博物館」の取り組みにより、広域の地域住民のノンフォーマルな学習による数学に対する興味・関心の醸成、学生の教材デザイン能力の高揚を確認できた。これらの教育におけるレジリエンスの高まりの追跡調査のプログラムの構築、実践を課題としてあげる。

ETロボコンから、宗谷で何が始まるか

稚内北星学園大学 小泉真也ほか

地域活性化は、その地「ならではの」地域資源ありきか

もちろん！

身の回りのもの、生活を共にするものであれば、地域経済とコミュニティ双方の循環的な強化が期待でき、足腰の強い持続性が期待できる
ただし、その「資源」は良質か？他の弱点を補って余りあるか？

・ 地域社会の歴史や生業等、そうした文脈との関連性にとらわれず、コミュニティへの訴求力が重要ではないか
・ ただし、地域活性化における影響が限定的（一時的、一部の人が結果を享受する）に終わらないか？

どうだろう？

2018年9月23日、宗谷（稚内）に「ETロボコン」を投下

ETロボコンは



デベロッパー部門プライマリークラス



ガレッジニア部門のデモンストレーション



同日開催のキャンパス相談会で操作体験

技術競技である

プライマリークラスで総合4位（競技3位）、5位

- ・ 各チーム同一仕様のロボットが命題をクリアするためには、ソフトウェアの良しあしが試される
- ・ 「正解」は最も優れた結果を示した提案であり、ただ最優秀のみが、その労力に適切な評価を受ける

ガレッジニア部門、予選1位で全国大会進出

- ・ 部品価格のみを制約し（50万円）、組み込みプログラミングを用いた「製品開発」を行う：技術だけでなく「誰のために何をする製品か」、そして「確実に売れるのか」、企画・創造・シーズ発想が試される

イベントである

一般来場客100名 [大会発表]

- ・ 「ロボット（どうし）の競技」という新たな体験を提供した街づくりイベント
- ・ 盛会を目標とする過程で、地元メディアとの共創による広報効果や、市民による心的支援によるコミュニティ強化への期待

大会役員、競技参加者計90名が来校

- ・ 大手企業のスタッフが役員を務める全国的な大会であり、競技参加者も市外からやってくるなど、実体験の下で「稚内の良さ」を実感する機会をつくる

たとえば、勝利への意欲喚起で

たとえば、経験値の向上によって

底上げすべき課題の具現化→教育体系の確立へ

数理情報学的観点から

- ・ システムの理解、設計技術、企画（発想）力、ビジネス・会計（理想と現実のトレードオフ、資金調達）、数学力
…高い学習効果のために、どのようなアプローチを採れば良いか
- ・ 初中等教育に対する「プログラミング教育」体系のモデル化、およびその外化

社会情報学的観点から

- ・ どうすればこのような催しに関心を寄せることができ、参加・協力の意識が想起されるか
- ・ 奉仕、協調、意識の醸成

ガレッジニア部門の取り組みから

還元

「ものづくり」・「ひとづくり」で宗谷を“ばふらめかす”

効果：ガレッジニア部門に対する継続的な意欲の発露

- ・ この部門は、アートとの親和性の良さが期待でき、本学の資産であるアートと情報学の融合的な成果が規定できる
- ・ 一品生産に対応するために3D製作環境～3Dプリンタ、3Dスキャナ、3DCADなどへの充実を検討
- ・ 学生らの意欲に対して、適切な環境整備を行うことによって、人材育成に循環的な効果をもたらす
- ・ ノウハウの蓄積・外化によって、新たな「ものづくり」の発想を喚起

※一部著作権上の関係で消しております。



総括シンポジウム

——「まちを教室」にして行ったCOC活動

稚内北星学園大学 COC事業

日時 10月27日(土) 10時30分
(受付開始 10時)

会場 稚内北星学園大学
新館4階大教室

第10回地域活動報告会

10:30~12:00

口頭発表
・「教たま数学教室」における学びと現状及び課題
・まちラボを拠点とした学生と市民の学びの交流
・Aamako JatoのIoT化及びこれに伴うセルローティの食文化と地域交流に挑む

ポスター発表 (3件)

COC 総括シンポジウム

14:00~16:30

5年間の取り組み内容及び成果報告

- おたくメディアラボ
学習コンシエルの配置と学修成果
- 地域教育支援室
地域の教育力向上と学生の学び
- まちなか振興支援室
まちなか振興支援室の活動が中心市街地にもたらしたもの
- 地域観光支援室
STPF との連携におけるインバウンド強化に向けた情報発信の取り組み

公開座談会
「COC 事業の成果と評価」

登壇者
稚内北星学園大学 学長 斉藤 吉広
稚内市まちづくり政策部 部長 川野 忠司
稚内市教育委員会教育部 部長 渡邊 祐子

情報交換会

18:00~20:00

会場 キッチン倶楽部緑好
(稚内市大黒2丁目1番9号 大黒ビル3階)

会費 3,500円

申し込み

ホームページからお申し込みください。
<http://www.wakoh.ac.jp/coc/from.html>

問い合わせ

稚内北星学園大学 COC 事業推進委員会
☎ 0162-32-7511 | FAX 0162-32-7500

稚内北星学園大学は、平成26年度から文部科学省「地(知)の拠点創生事業(COC 事業)」に認定され、「地域の教育力向上とまちづくりで協働する地(知)の拠点整備」というタイトルのもと、地域の拠点としてこれまでより一層、全学的に地域連携活動に取り組んできました。

本学 COC 事業の柱は、①地域の教育力向上、②観光まちづくり、③中心市街地活性化であり、それぞれの取組みを相互連携が図ってまいりました。

本シンポジウムでは、COC 事業5年間の取組内容のまとめ、再支援ならびに大学内に設置した学生支援施設からの報告や連携自治体からの評価などを通じて、地域を学びの場とした学生の成長や地域貢献についての成果を発表します。

稚内北星学園大学 WAKAI HOKKAIDO GAKUEN UNIVERSITY 地(知)の拠点

問い合わせ先

稚内北星学園大学

COC推進委員会事業推進室(事務局総務課)

〒097-0013 北海道稚内市若葉台1丁目 2290-28

TEL 0162-32-7511

FAX 0162-32-7500

E-mail info@wakhok.ac.jp

わくほくCOCホームページ

<http://coc.wakhok.ac.jp/>

COC推進委員会 COC 総括シンポジウム・第10回地域活動報告会実施報告書 編集小委員会 委員一覧

佐賀 孝博(副学長/教授/事業推進責任者)

石橋 豊之(助教/事業推進室長)

高 澍(特任助教/学習コンシェルジュ)

COC 総括シンポジウム・第10回地域活動報告会実施報告書

2019(平成31)年3月30日発行

編 集 COC推進委員会 COC 総括シンポジウム・第10回地域活動報告会実施報告書
編集小委員会

発 行 稚内北星学園大学 COC推進委員会
〒097-0013 北海道稚内市若葉台1丁目 2290-28
電 話:0162-32-7511(代表)
メール:info@wakhok.ac.jp